ストライクウィッチーズ私達を守ってくれた人

宮沢勝人

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
ストライクウィッチーズ私達を守ってくれた人

【Ｎコード】
Ｎ７５６２Ｔ

【作者名】
宮沢勝人

【あらすじ】
普段から一人で居ることが多かった主人公がウィッチーズ隊の皆と出会い少しづつ変わっていった。

オリジナル主人公紹介（前書き）

キャラクター紹介です。

オリジナル主人公紹介

名前　黒鋼

年齢　１６歳

性別　男

身長１７９？

体重５９？

趣味　旅をすること、体を鍛えること、料理、楽器は何でも使える（アニソン）！

好きな物　酒や炭酸飲料（サイダー）、風呂に入ることやサウナの後の水浴び。

嫌いな物　仲間を傷つける奴や恩人に罪を着せる奴が嫌い、こそこそ隠れて何かを企む奴！

キャラクターのモデル

黒鋼［ツバサ・クロニクル］の見たまんまです。

瞳も髪も同じですが片目だけ刀を持つと蒼に変わる。

キャラクター説明

何時も一人で居ることが多く友達も一人もいない。

部活動も参加せずにサボっていた。

魔法を使う事が出来るがあまり使わない様にしている。

何故か人に恩を感じたらその人を守り続ける。

理由は作者でも解らないらしい。以上！

オリジナル主人公紹介（後書き）

主人公は完成した。

プロローグ（前書き）

始まりは何時も突然♪

プロローグ

俺に力があれば大切な人を守れたかもしれない。

そう思いながら自分の心を押し潰していった。

何も思い出したくない、あの日俺は心を邪神に売った記憶もある、だが光の戦士と言う3人の力により俺は心を取り戻した。

それから9年が過ぎて新しい力を手に入れて光の戦士達の力で誰かを守る為に戦うと決めた。

〜現在〜

そして自分に出来る事を考えながら学校に登校途中近くの川で頭から変な絵が頭に流れた。その絵は俺が十一人の女子と笑って空を飛んでいる絵だった。この時俺は気にはしなかったが。

新しいウィッチーズと光の戦士達のこの時俺は気にはしなかったが。

新しいウィッチーズと一人の魔術騎士の話が始まる。

プロローグ（後書き）

作者「世界は１つさー♪」
黒鋼「何でウルトラマンダイナのＥＤ歌ってんだ？」
作者「へ？何となく！」

黒鋼「歌うなよ？！あんた今何歳だ！？」

作者「へ？今年で１８歳だぜ！」

黒鋼「お前な！？」

第一話　出会いと初戦闘

～学校の屋上～

？（俺より強い奴はこの世界にはいないな）

ふとそんなこと思いながら空を見ていた。

俺が普通の人間では無いのをこの世界の奴等は知らない。

普通と違うから自分が嫌になることも多かった。

教師「おい！黒鋼起きんか」

教師は俺の頭を教科書を丸めて叩いてきた。

黒鋼「あ」

あくびをしながら俺は頭を擦った。

教師「お前俺の授業に昼寝とは良い度胸だな！」

俺は鞄を持って家に帰宅した。

家に帰っても誰もいない。

それもそうか9年前に誰かに殺されてしまった。

それ以来俺は何時も一人で親父の形見を手入れしていることだけだった。

親父の形見は日本刀で名は［銀龍］と言っていた。母の形見は勾玉で母が俺の安全な未来を心配して残してくれた。

親父からは剣の修行をよく教えてもらった。

俺が学校の裏サイトを読んでいるとこんな七不思議が有った。

『夜の0時に学校の図書室に行くと見知らぬ本が一冊置いてある。』

俺はこういう七不思議がかなり好きでその謎を解くのがかなり好きだ。

～夜の0時～

俺は学校まで銀龍と勾玉を持って学校の窓ガラスを破った。

黒鋼「しかし何で深夜なんだか、解らなねーな？」

そう呟きながら俺は図書室の本をあらかた調べたがそれらしき本は

なかった。
黒鋼「デマか？」そう思った瞬間俺の頭がいきなり痛み始めた。
すると後ろを振り向くと表紙にはタイトルが書いてない本が置いてあった。
黒鋼「何だこれ？」
本を開いた瞬間いきなり本が光始めた。

光が徐々に消えて赤色の光が見えた。
しかし目を開くとそこには何かに破壊された街の真ん中に俺は立っていた。
黒鋼「何だこりゃ。」
辺りには人の遺体がかなり落ちていた。
黒鋼「酷すぎる」
銀龍を持ちながら俺は呟いた。
すると何処からか女の子の泣き声が聞こえた。
少女「ひく、ひく…」
泣きながら歩いていた。
すると上から何かの破片が少女の頭上から落ちてきた。
黒鋼「危ない！」
俺は少女の方へと全速力で走った。
～女の子～
私は上空からカールスラントが炎に包まれているのを見ていた。
？「トゥルーデ！気を付けて」
私はミーナの忠告を無視してネウロイに銃弾を連射した。
ネウロイの体からコアを発見しそれをＭＧ４２でコアを破壊した。
しかし私はふと下を見ると妹のクリスがネウロイの残骸の真下に居た。
？「クリス！！」
私はネウロイの残骸に降り立った。
しかしクリスがネウロイの残骸の下敷きにならないでほしいと神に

祈った。
ミーナ「トゥルーデ」
私の肩に手を置くミーナ、するとハルトマンが何かに気付いたのか
何かを言ってきた。
ハルトマン「トゥルーデ！あれ見て」
ハルトマンの指差す方向を見るとネウロイの残骸の真下から黒い龍
が出てきた。
バルクホルン「な、何だこれは？」
龍はゆっくりと右手から私に何かを差し出した。
バルクホルン「クリス！」
私は目を疑った。
ネウロイの下敷きになったかもしれないクリスが黒龍の手のひらで
眠っていたのだから。
黒龍「娘」
バルクホルン「お前喋れるのか？」
黒龍がいきなり喋った事に私は驚いたが黒龍の話を聞くことにした。
黒龍「家族を大切にな！」
私にそう言って黒龍は何処かへ飛んでいった。
バルクホルン「あの龍は一体？」
クリス「ん？お姉ちゃん？」

クリスが目を覚まし私にこう言った。
クリス「お姉ちゃん？ツンツン頭のお兄ちゃん見なかった？」
バルクホルン「ツンツン頭のお兄ちゃん？」
私が頭を傾げてそう呟いた。

～黒鋼～
黒鋼「しかし久しぶりに龍に変身したな。」
俺は昔母の禁術書から龍に変身できる魔術を修得した。
かなりスタミナを使うのであまり使わないようにしている。

黒鋼「しかし此処確か日本だよな？」
日本に降りたった筈なのによく見ると女の子下に履いているのはズボンやスカートではなくスクール水着を履いていた。
歩きながらそう思っているとある女子中学校の近くを通った。
〜？〜
？「芳佳ちゃん危ないよ！」
幼馴染みのみっちゃんが私に忠告した。
宮藤「大丈夫！後もうちょっとだから」
私は手を伸ばして猫さんの体を掴んだ。
宮藤「よかった」
そう言った瞬間に崖に生えていた木がいきなり折れた。
私は力強く目を瞑った。
？「おい！大丈夫か？」
男の人の声が聞こえた。
私はゆっくりと目を開けると頭がツンツンな髪をした２６歳位の男の人が私のお腹に腕を木の枝みたいにして私を助けてくれた。

宮藤「あの、ありがとうございます。」
私がお礼を言うと男の人は地面にゆっくりと私を下ろしてくれた。
？「ああ。気にすんな、さてと今日は何処に泊まるとするか？」
もしかして旅の人かな？
宮藤「あの！」
？「何だ？」
男の人は私の方に向いた。
宮藤「私の家に来ますか？」

私がそう言うと男の人はみっちゃんに持っててもらった扶桑刀を腰に付けてこう言った。
？「良いのか？」
男の人は目を大きくしてそう言った。

宮藤「はい！」
私が返事をすると男の人はお辞儀をした。
？「悪いな」
宮藤「いえいえ」
私が手を左右に降ってそう言った。
校門前に出るとみっちゃんのお爺ちゃんがトラクターでみっちゃんの迎えに来てくれた。
美千子「あ、おじいちゃん！」
手を振りながらおじいちゃんに此所だよ教えた。
じいさん「おー美千子！！」みっちゃんのおじいさんに頼んで家まで送って貰った。

〜黒鋼〜

この髪の短い女が宮藤芳佳俺の恩人と思えば良いよな。
すると港の方をふと見ると見たこともない船が停まっていた。
みっちゃん「あれかな？今日到着した軍艦て？」
宮藤の友達がそう言った。
宮藤「戦争の船だね、やだな」
この時の宮藤の顔が悲しそうに見えた。
黒鋼「宮藤は戦争が嫌いか？」
俺が宮藤に聞いたら宮藤ははっきりと「はい」と言った。
宮藤の父は戦争のせいで死んでしまったらしい。
黒鋼「悪い」
どうしてか解らないが宮藤の嫌な思い出を思い出させてしまったからだ。
宮藤「いえ、黒鋼さんが謝ることじゃないですよ」
宮藤は明るい顔で俺に気にしてないように言った。

しかし俺は少しだけ嫌な予感がした。

それは2分後に起きた。
いきなり美千子の祖父さんが運転を誤った。
宮藤の友人の美千子が物凄い揺れで手すりを掴んでいたが手を離してしまった。
宮藤「みっちゃん！」
宮藤は美千子に手を伸ばすが届くわけがなかった。
黒鋼「っち、仕方ねーな」
舌打ちをして銀龍の鞘で美千子の体を安全な場所に目掛けて打った。
しかし俺は朽ち木の跡に腹部に当たった。
黒鋼「ぐは！」
体には激痛が走った。
宮藤「黒鋼さん！」
宮藤が俺の元へ走ってきた。
黒鋼「宮藤？」俺は宮藤に気にするなと言うとしたら宮藤はこう言った。
宮藤「動いちゃだめ！」
宮藤の頭とお尻から犬の耳と尻尾が生えた。
すると腹部の傷が少しだけ直ってきたが宮藤の息が荒くなってきた。
すると宮藤の後ろから眼帯と髪を結んだ女が宮藤の肩を掴んで何かを話していたと言うより教えている様だった。
俺は気絶してしまった。

〜？〜

あれが宮藤博士の娘の宮藤芳佳か。
しかしあの男は一体何者なんだ？

もう一人の少女を助けるなんてな。
？「土方！あの男は一体何者か調べてくれ」
私は部下の土方にあの男の調べるように言った。

～黒鋼～

目が覚めると知らない家に寝ていた。
？「起きましたか？」四十位の女性がそこに立っていた。
黒鋼「あんたは一体？」
俺が体を起こすと宮藤の鞄が近くに有った。
黒鋼「宮藤は？宮藤芳佳？」
俺が女性に聞くと居間の方を指を指した。そこには布団の中ですやすや眠っている宮藤が居た。
黒鋼「呑気に寝てやがるな」
俺がそう言ったら女の人は俺にこう言った。
？「優しいですね。芳佳を心配してくれるなんて」
黒鋼「そうか？俺には普通に思えるがな。あんた宮藤の母親か？」
俺がそう聞くとそうだと言った。
居間のに座ろうとしたら眼帯をした女が座っていた。
黒鋼「お前は…誰だ？」
俺が女に訪ねた。
女の名前は坂本美緒で５０１戦闘航空団ストライクウィッチーズの一人で階級は少佐と言った。
坂本「私はお前に聞きたいんだがお前は何者だ？」
俺が人間じゃ無いみたいに言うなこの女。
黒鋼「俺は黒鋼下の名前は昔に捨てた。」
思い出したくもない。
死んだ名前なんて。

宮藤「黒鋼さん！」
いきなり宮藤が大声で目を覚ました。
黒鋼「何だ宮藤？」
宮藤「黒鋼さん！大丈夫ですか？痛いところは無いですか？」
俺を目茶苦茶心配してくれる奴なんて母上と父上以外居なかったな。
黒鋼「ああ！心配すんな。」
俺は普通に答えた。
こいつの家系は昔から診療所の家系らしい。
今になって初めて知った。坂本「お前達に折り入って頼みたいことがある。」
坂本が真剣な顔でこう言った。
坂本「私達と一緒にネウロイを戦おう。」
宮藤「はい」
宮藤ははっきりと返事をしたが俺はネウロイとは何か解らない。
戦闘機か？悪の組織か？
そんな事を考えていたら宮藤のお祖母ちゃんが「芳佳を戦争に行かせるつもりですか？」と言った。
黒鋼「芳佳は俺の恩人だ！！戦争に行かせるかよ。」
目を鋭くして俺はそう言った。
宮藤「戦争、嫌です！！私学校を卒業したらこの診療所を継ぐんです！！」
宮藤ははっきりと坂本に拒否した。
坂本は意外だと言いたげな顔をしていた。
坂本「まぁ、いきなり了承が来るとは思わないしな」そう言って坂本は宮藤に何かを言って帰ってしまった。宮藤は舌を出しながら「べー！！」と言った。
やっぱり子供だな。

～宮藤～

宮藤「黒鋼さん！ご飯食べますか？」
私は黒鋼さんを呼びに言った。
黒鋼さんは外で空手の様な動きをしていた。
正拳や回し蹴りが綺麗に見えた。
とそんな事より。
宮藤「黒鋼さん！ご飯出来ましたよ。」
と私が言ったら黒鋼さんは練習を辞めて汗を流しながらこっちを向いた。
黒鋼「ん？ああ！今いく！」
歩きながらこっちに来るついでに手を川の水で洗っていた。
ご飯を食べ終わって「黒鋼さんは何処で寝ますか？」
とお母さんが聞いた。
黒鋼さんは屋根の上で寝るからと言って本当に寝ていた。

～黒鋼～

屋根の上で寝るのも久しぶりだな。
それにしても星空が綺麗だな。
宮藤がもし戦争に行くと言ったら。
黒鋼「俺も行くか！！」
と呟きながら銀龍を枕の代わりにして一夜を過ごした。
翌日宮藤の家の前を箒で掃いた。
宮藤「黒鋼さん！庭掃除してたんですか？」
気が付くと宮藤が箒を持って俺と同じく掃除をしていた。
すると郵便屋が宮藤に手紙を渡した。
郵便「お手紙です！」

と言って去っていった。
宮藤は手紙の送り主を見て家に急いで戻った。
一体何事かと思い俺も宮藤の家に戻った。宮藤「どうして？お父さんから手紙が？お父さんは死んだんじゃないの？」
お婆「おちつきなさい！！」
手紙の中身を宮藤の母がゆっくりと取り出した。
母「ブリタニアから届けられてるわね！」
中身は宮藤博士の写真と手紙だった。
写真には宮藤博士と坂本が写っていた。
宮藤「お父さんがブリタニアに」
俺は銀龍を持って宮藤の手を引いた。
黒鋼「ブリタニアに行ってみるか？」
俺がそう聞くと宮藤は「はい！！」と言った。
黒鋼「こいつに恩が有るからなやってやるか。」
街に出て海岸に行くと坂本が刀を持って待っていたと言いたそうに立っていた。
坂本「よく来てくれた！」坂本が宮藤に何故かお礼を言った。
宮藤「あ、あの！「停学の手続きは任せろ、私に任せておけ！」あ、あの！入隊しに来たんじゃ無いんです。」
宮藤がそう言うと坂本は大笑いしていた。
俺は呆れて何も言えなかった。
そして宮藤博士から手紙が来たと言ったら目が真剣になっていた。
坂本「宮藤博士から手紙が？」
宮藤「あの、坂本さんはお父さんの事知ってるんですか？」
坂本「ああ！宮藤博士は我々ウィッチの命の恩人だ！」
坂本が宮藤に色々教えた。
つまり宮藤の父親は偉い学者さんて事だ。
宮藤はそれを聞いて「ブリタニアに連れて行ってください！！」と頼んだ。坂本は宮藤の肩を叩いて「その意気だ！！」と言った。
黒鋼「仕方ね～な、俺もブリタニアに行くぜ。宮藤は俺の恩人だか

らな」
俺がそう言うと坂本が宮藤と同じ様に俺の肩を叩いた。
宮藤の家に一旦戻ると宮藤がブリタニアに行くと解っていたのか宮藤の母が荷物を用意していた。
荷物の中には着替えが何着も入っていた。
俺は銀龍と勾玉しか持っていなかったので軽めに用意が出来ていた。
宮藤母「黒鋼さん、芳佳の事よろしくお願いします！」
お辞儀をしながら俺に頼んだ宮藤の母に俺は「わかった」と言って頷いた。赤城に乗り出航するまで俺は空を見上げていた。
風がまるで別れを言っているのか優しく吹いていた。

〜宮藤〜

港にはみっちゃんやお母さんが来てくれた。みっちゃん「芳佳ちゃん！気を付けてね！」
みっちゃんが手を振ってくれていた。
お祖母ちゃん「体に気を付けるのよ！」
お祖母ちゃんが私の体を心配してくれた。
お母さん「芳佳…！」
お母さんには生まれてからずっとお世話になったな。
宮藤「行ってきまーす！！」
皆に大きな声でそう言った。
黒鋼「悲しいか？宮藤？」
黒鋼さんが手すりに体をすがらせてそう言った。
宮藤「ほんの少しだけ寂しいですけど、ブリタニアにはケガをした人が多く居ると思うんです。だから私はその人達の事を考えたら悲しくないなって」私が黒鋼さんにそう言うと黒鋼さんは目蓋を一度閉じてこう言った。
黒鋼「お前がそう言うなら最後の最後まであきらめるなよ」

黒鋼さんはそう言って階段を下りて艦内の船室に向かった。

～黒鋼～

あいつには命を救われたからな。
黒鋼「この恩は必ず倍にして恩返ししないとな！」
ベットで寝ながらふとそんな事を思っていた。
銀龍の刃をじっと見ながらネウロイという化け物が何なのか誰かに聞けば良いだろうが聞きたくない。
船室を出て坂本が扶桑刀を両手に持ちながら俺に何かを投げて来た。
投げて来たのは扶桑刀だった。
黒鋼「なんのつもりだ？」俺が扶桑刀をうまくキャッチして坂本が何を企んでいるのか聞いた。
坂本「すまんが訓練に付き合ってくれ」
坂本は笑いながらそう言った。
黒鋼「ふ」
鞘から刀を抜き片手で刀を持ち「何時でも良いぜ」と言った。
坂本はいきなり走り刀で連続攻撃をしてきた。
俺は全ての攻撃をうまく交した。
奴の剣技を見る限り刀を完璧に慣れていた。
いきなり技を撃とうか迷ったが辞めることにした。
至近距離の攻撃に対応しきれず坂本の攻撃を片手で受け止めた。
右手から大量の血が流れているのに築かなかった。
坂本「！黒鋼大丈夫か！」
坂本は駆け寄ってきた。
黒鋼「心配すんな！これぐらいで死ぬ俺じゃねーよ！」
普通に平気だと言った。

自分を仲間だと思ってくれる奴なんてこの世にはいない。

〜一ヶ月後〜

宮藤「まだ見えないな」

坂本「ブリタニアの到着にはあと半日掛かるぞ！」
宮藤がモップを持ちながらそう言った後に坂本が答えた。
黒鋼「そんなに掛かるのか？」
俺がそう聞くと坂本は頷いた。
宮藤「だって！もう一月も経つんですよ！」
宮藤は少し怒った顔でそう言った。
坂本「とにかくブリタニアに着いたら！住所を調べてそこに行ってみよ…！」
いきなり坂本が走りだして赤城の先端に立ち何かを見ていた。
そして坂本は大声でこう言った。
坂本「敵襲！」
その声で赤城からサイレンが鳴り響いた。
坂本「右前方雲の上だ！！」そう坂本が的確な場所を告げると天城の主砲が雲に向かって放った。
黒いエイの形をした飛行物体が飛んでいた。
黒鋼「あれがネウロイ」

始めて見たが大きさは二百？の大きさだ。
坂本「宮藤、黒鋼お前達は非戦闘員だ。」
俺と宮藤は安全の為に医務室に向かった。
激しい戦闘をしているのだろう揺れや爆発音がよく聞こえる。
宮藤は耳を塞ぎながら少し震えていた。
扉がゆっくり開き坂本が医務室に入って来た。
坂本「宮藤！」

宮藤の名前を呼んでいるのに宮藤は強く耳を塞でいた。
坂本「宮藤！！」坂本が大声宮藤を呼んだ。宮藤はやっと自分が呼ばれた事に築いたらしい。
坂本「何て顔だ！それでも扶桑の撫子か？」
意味はよくわからないが坂本が宮藤にそう言った。
宮藤は震えながらこう言った。
宮藤「震えが止まらないんです！」
坂本は宮藤の耳に何かを入れてこう言った。
坂本「インカムだ！戦闘中なら何時でも連絡が出来る！ただしピンチの時だけだぞ。」
坂本が宮藤にそう言って戦闘に行くと言った。
宮藤「坂本さんは怖くないんですか？」
坂本はこう言った。
坂本「私がやらなければこの船は沈没する、だから私は戦い続けるストライクウィッチーズの一員としてな！」
坂本のその言葉を聞いて俺は銀龍を持ち宮藤の近くまで歩いてこう言った。
黒鋼「お前は俺が守る、ブリタニアまで必ず守る。」
そう言いながら首飾りのよに首にぶら下げていた勾玉を宮藤の左手にブレスレットの様にして紐で優しく巻き付けた。
宮藤「黒鋼さん？」
宮藤は俺が何をしているのか解らないらしい。
黒鋼「俺が帰って来るまでその勾玉を任せたぜ！」
宮藤の頭を優しく撫でた。坂本「お前も戦うのか？」
坂本が意外だと言いたげな顔をしていた。
黒鋼「ああ！宮藤には恩があるからな！その為に俺は戦う！」
銀龍を強く握り閉めて甲板の上に立ち坂本の足にはストライカーユニットを装着していた。
俺は坂本にこう言った。
黒鋼「坂本！悪いがもしもこの力を見てもあんたの隊長さんには教

えるなよ！いいな！」
俺がそう言うと坂本は頷いた。
俺の飛行魔法の一つドラゴンウンイングその力はどんな攻撃効かない最強の翼であると同時に時速７９５？のスピードを出せる。
坂本「坂本美緒出る！」
坂本は滑走路を出撃した。
黒鋼「黒鋼行くぜ！」
ドラゴンウンイングを力強く羽ばたかせて大空を飛んだネウロイを真上から見てもやっぱりでかい。
黒鋼「喰らえ！火炎龍撃破！」
銀龍を鞘から抜き銀龍の先端に炎の魔法を放った。
ネウロイの体の３０％が消滅した。
黒鋼「こんなものか？」
少しだけ不気味に笑みを浮かべる俺に坂本が呆れていた。
坂本「！いや、まだ終わってないぞ、黒鋼！」
ネウロイの方を見ると再生していた。
黒鋼「おい、トカゲかよ！？」
そうつっこみながらネウロイのビーム攻撃を交わしまくる俺だがネウロイの弱点のコアが何処に在るのか解らない。
ネウロイのビーム攻撃が赤城に直撃した。
坂本「しまった。宮藤、宮藤！」
坂本がインカムで宮藤に通信するが応答がない。
黒鋼「ネウロイ！地獄へ送ってやるぜ！！」
俺は武装魔法を発動した。
両腕にはミサイルランチャー弾数は六発装備した。
黒鋼「消え去れ！ワイバーンミサイル発射！」俺がそう言った瞬間にミサイルが十二発同時に発射した。
ネウロイの体に全弾命中した。
坂本「何て奴だ！」

坂本がそう呟きながら言ったが俺の怒りはこんなものではない。
何故だか解らないが俺の目には何故か涙が零れていた。

坂本「黒鋼！お前何を泣いているんだ？」
坂本がそう質問してきた。
するとネウロイの方を見ると煙が晴れてネウロイがまだ生きていた。
黒鋼「嘘だろ！？」
俺がそう言った瞬間にネウロイがいきなりビーム攻撃を仕掛けてきた。
ビーム攻撃を交わしまくる俺だがネウロイをどう倒すか考えながら攻撃を交わした。
すると赤城の甲板を見ると宮藤がストライカーユニットを履いていた。
坂本「あいつ！ストライカーユニットを履けるのか？」
つまりあいつも飛ぶことが出来るのか？
俺は宮藤の方を見ているとネウロイは宮藤に攻撃を仕掛けてきた。
滑走路を飛ぼうとした宮藤はバランスを崩して海に真っ直ぐ行った。
宮藤「飛んでー！」
宮藤は自分にそう言った。
俺&坂本「「飛べー！宮藤ー！」」
俺と坂本が同時にそう言った。
宮藤は上手く空を飛んだ。
黒鋼「宮藤！」
俺は安心した。
坂本「おーい！何処に行くんだ？」
魔法のコントロールが上手く出来ていないみたいだ。
坂本「危ない！」
ネウロイのビーム攻撃が宮藤に襲い掛かってきた。
宮藤「きゃ！」

宮藤は両手を前に出した。
すると巨大な魔力シールドが出現した。
黒鋼「これが宮藤の力！？」
俺はそう呟きながら宮藤の近くまで飛んだ。
坂本「よく来たな！」
坂本が宮藤にそう言った。
宮藤「坂本さん！鉄砲を！」
宮藤が機関銃を坂本に差し出した。
坂本「いや、お前が撃て！」
坂本が宮藤にそう言った。
宮藤「え？」
宮藤も少しだけ驚いた。
坂本「守りたいんだろ？」
坂本は宮藤にそう言った。
宮藤「はい！」
宮藤もヤル気満々だ。
坂本「黒鋼！お前は上空からミサイルを発射してくれ！」
坂本は俺にそう言った。
黒鋼「ああ！任せろ！」
俺は千メートルの高さまで上昇した。
黒鋼「宮藤！俺がミサイルを発射したらお前が止めを射すんだ！良いな！」
俺がそう聞くと宮藤は頷いた。
黒鋼「行くぜー！ワイバーンミサイルスタンバイ！」
両腕にはミサイルランチャー×六発と両足にミサイルランチャー×六発を装備した。
黒鋼「喰らえー！ワイバーンミサイル全弾発射！」
ワイバーンミサイルは雨の様にネウロイに直撃した。
ネウロイの装甲が七割削れて弱点のコアを発見した。
宮藤はネウロイのコアを機関銃で破壊した。

黒鋼「よし！」
俺は両手を拳にして喜んだ。
宮藤がネウロイを倒した。
宮藤は意識が途中で無くなったのか目を閉じて眠ってしまった。
坂本「大した奴だな！」
坂本が宮藤を抱きながらそう言った。
俺は頷きながら辺りを見回した。

～バルクホルン～

あれはネウロイの残骸だな。
そう言えばクリスを助けてくれたツンツン頭の男は何処の国の人間なんだ。
？「コアが破壊されてるみたいだよ！」
ルッキーニ少尉が驚きながらそう言った。
バルクホルン「こちらも確認した！」
私はルッキーニ少尉にそう言った。
？「坂本少佐！ご無事ですか～？」
ペリーヌが坂本少佐の心配をした。
ルッキーニ「ペリーヌの奴、どさくさに紛れて少佐に抱き着く気だよ！ニヒヒ！後でからかってやろ～と！」すると少佐の抱いているのはクリスに似ているウィッチだった。
しかしもっと驚いたのは男が空を飛んで居ることだ。
黒い髪にツンツン頭の男が翼で空を飛んでいた。
ペリーヌ「何なんですの！あの小娘は！」
ペリーヌが怒りながらそう言ったが私が驚いているのは男がストライカーも無しに空を飛んで居ることだ。

～黒鋼～

ブリタニアに到着した俺達はまず最初に宮藤博士の研究所まで車で走った。
宮藤の父親が研究していた場所に着いたが建物はかなり前に倒壊したらしい。
すると坂本が岸の見える崖の上に連れて行ってくれた。

そこには外国語で宮藤博士の墓地と書いてあった。
宮藤「坂本さんは知ってたんですね！」
坂本はすまないと言ったが俺は許す訳がないしかし宮藤は笑顔で「いいんです！」と宮藤は言った。
宮藤「お父さんが生きてると思ってきたのに縁がないのかな？」
宮藤は笑顔でそう言った宮藤に俺は宮藤の頭を撫でてこう言った。
黒鋼「泣きたいなら、泣いていいんだぜ！」
宮藤「う、ウァァァァン！ウァァァァン！」
宮藤は俺の胸で大粒の涙を流した。
大切な父親を失うのはとても辛い事だ。
黒鋼「ふ！」
鼻で笑い宮藤の頭を優しく撫で終わり宮藤は坂本にこう言った。
宮藤「坂本さん！私をストライクウィッチーズに入れて下さい！」
宮藤がそう言った瞬間に坂本はかなり喜んでいた。
ちなみに俺はお前に任せると言った。～ウィッチーズ隊の基地～

黒鋼「此処が５０１戦闘航空団ストライクウィッチーズ！！」
俺は余りにもでかいウィッチーズ隊の基地に驚いた。
すると坂本が基地の前に女が９人立っていた。
坂本「あ～！新しくウィッチーズ隊の新入りの宮藤芳佳と黒鋼だ！」
宮藤「宮藤芳佳です！よろしくお願いしまーす！」

黒鋼「黒鋼だ！」

宮藤は元気な声で挨拶をしたが俺は適当に挨拶をした。

新しい生活の始まりだ。

続く

第一話で主人公が使用した技と魔法

ワイバーンミサイル
黒鋼の五番目の魔法にして二番目に黒鋼のお気に入りの武装！
形はガンダムＳＥＥＤのジンの大型ミサイルと同じモデルです！
最大５８発装備可能！

火炎龍撃破、
銀龍に炎の魔法を発動して放つ黒鋼の四番目の必殺技！
赤い龍が敵に巻き付きそのまま爆発する。
他にも攻撃方々があるがそれは次の話で！

ドラゴンウィング
黒い竜の翼で飛ぶ時に使うことが多いがネウロイのビーム攻撃も防ぐ事が出来る！飛ぶときの速さは時速７９５？だがリミッターで封印しているためそこまで速く飛べない。

ドラゴンソウル
あらゆる龍またはドラゴンに変身可能！
バルクホルンの妹のクリスを助けた時は黒龍に変身した。
モデルはレッドアイズダークネスドラゴンです。
本当の姿は黒龍ではなく違う姿の龍になります。
焦ったりすると黒龍になります。
以上です！

第二話　私の目標

～宮藤～

私は目を覚まして見たことない部屋のベットで寝ていた。
窓の外を見て思い出した。
宮藤「そうか！私ブリタニアに来たんだ！」
私はそう呟いた。

砂浜

黒鋼「ふ！せい！」
朝早くに黒鋼さんが扶桑刀で素振りをしていた。
その姿は本当に侍に見えた。
黒鋼「・・・宮藤か！」
扶桑刀を鞘に戻しながら黒鋼さんがそう言った。
宮藤「おはようございます！黒鋼さん！」
私は黒鋼さんに挨拶をした。
黒鋼「おう！珍しく早く起きるとはな！」
黒鋼さんは私にそう言った。
宮藤「どういう意味ですか？」
私は頬を膨らませて黒鋼さんに聞いた。
黒鋼「自分の頭で考えろ！宮藤！」黒鋼さんは私にそう言って基地に戻っていた。

～黒鋼～

この基地の格納庫に何か使わない部品が有ったら使わせて貰います

か。
？「にゃにゃ！」
ん？今なんか猫の様な声が聞こえたな。
黒鋼「誰か居るのか？」
俺は大声で言った。
しかし姿を現さない。
黒鋼「っち！仕方ねーな！」
指から雷の玉を声のした方に向かって放った。
黒鋼「バリバリボール！」
電撃の玉が隠れている奴に向かって誘導弾の様にその声のした方に向かった。
？「ひゃう！」
姿を表したのはウィッチーズ隊の一人フランチェスカ・ルッキーニ少尉だった。黒鋼「あ！？」

俺はルッキーニ少尉に当たらないように攻撃をしたのでボールは全て外れた。
黒鋼「何をやろうとしていたんだ？フランチェスカ・ルッキーニ少尉！」
冷静に何を仕様としたのかルッキーニ少尉に聞いた。
ルッキーニ「あ、えっと！何にもしようと思ってないよ！」
ルッキーニはそう言ったが目が違う方を向いていた。
黒鋼「そうか！ならお前に言って置く！俺はこそこそする奴がこの世で一番嫌いなんだよ！！殺したいほどにな！」
銀龍の鞘をルッキーニに向けて殺気を出しながらそう言った。
ルッキーニ「うにゅゅゅ！ニャアアア！！」
ルッキーニはあまりの恐怖に震えながらその場から逃げ出した。
黒鋼「やり過ぎたか？」
加減などする必要もなさそうだったのであんなことを言ったが今度

謝って置くか。

～ブリーフィングルーム～

ウィッチーズ隊の隊長のミーナ・ディートリデ・ヴィルケ中佐に自己紹介と渡したい物があると言われた。
ミーナ「補充要員の宮藤芳佳さんと黒鋼さんです！」
最初に宮藤が自己紹介をした。
宮藤「宮藤芳佳です！」
挨拶は前と変わらない。
黒鋼「黒鋼だ！」
銀龍を腰に付けたまま俺はめんどくさそうに挨拶をした。
ミーナ「階級は二人とも軍曹になるので同じ階級のリーネさんが面倒を見てあげてくださいね！」
そうミーナが言っている最中に宮藤は銃をミーナに差し出して「必要ありませんから、」と言った。
俺も同じく必要が無いのでミーナに渡した。
ペリーヌ「何よ！何よ！」
眼鏡を掛けた女が怒りながら何処かへ行ってしまった。

ミーナ「あらあら！では解散！」
ミーナはそう命令した。
後ろから嫌な気配を感じた。
黒鋼「何をしようとしてるんだ？ルッキーニ少尉？」
俺が睨みながらルッキーニにそう言った。
ルッキーニ「うにゅう～！」
？「おい！あんまりルッキーニをいじめんなよ！！」

胸の異常にでかい女が睨みながら俺の腕を強く掴んでそう言った。
黒鋼「ああ！」
俺も睨み返した。
だが喧嘩をする気も無いので俺は銀龍を腰に指したまま自分の部屋に戻った。

〜リーネ〜

さっきシャーリ中尉と新人さんの黒鋼さんが喧嘩みたいな雰囲気になってたけど黒鋼さんが扶桑刀を持ってどっかに行っちゃたな。
ミーナ「あ！リーネさん！ちょっと良いかしら？」
ミーナ隊長が私を呼んだ。
リーネ「あ、はい！何ですか？ミーナ隊長！」
私はミーナ隊長にどうしたか聞いた。
ミーナ「黒鋼君と買い物に行ってきてもらえないかしら？運転は黒鋼さんが出来たら鍵を渡しておいて！」
そう私に言って車の鍵を私に渡した。

〜黒鋼の部屋〜

私は今黒鋼さんの部屋の前に立っていた。
ドアをノックすれば良いんだけど男の人のドアをノックするの勇気がいるんだな。
ルッキーニ「リーネ何やってんの？」

ルッキーニちゃんが後ろから私の胸を揉んできた。
リーネ「ひゃあー！」
私はびっくりして大声を出した。
すると黒鋼さんの部屋から「やめろー！」と叫び声が聞こえた。
ルッキーニ「ニャアアア！」
ルッキーニちゃんは怖くなったのかその場から逃げてしまった。
私はびっくりしたけど私はドアを開けた。
すると黒鋼さんはベットでうなされていた。
黒鋼「や…め…ろ！ガ…タ…ノ…ゾ…ー…ア！」
黒鋼さんはそう言った。
リーネ「黒鋼さん！黒鋼さん！」
私は震えながら黒鋼さんの体を手で揺らした。
黒鋼さんは目が覚めたのかゆっくりと目を開けた。
黒鋼さんの目から涙が零れ落ちていた。
リーネ「大丈夫ですか？黒鋼さん？」
黒鋼さんはこっちを向いて頷いた。
黒鋼「ああ！何か用か？」
ベットに座りながら黒鋼さんが聞いてきた。
リーネ「あの、ミーナ隊長から黒鋼さんと買い物に行ってきてくださいって頼まれたんです…」
私は震えながら黒鋼さんにそう言った。
黒鋼「成る程な！よし、俺も暇だったしな、荷物持ちと運転は任せろ！」
黒鋼さんは少しだけ笑顔で私にそう言った。
リーネ「あ、はい！なら鍵を渡して置きますね！」
私は顔を赤くしながら黒鋼さんに鍵を渡した。

～ハンガー～

私はミーナ隊長から買い物リストと軍資金を貰った。
黒鋼さんは扶桑刀を片手に持ってトラックに乗ってエンジンをかけて待っていた。黒鋼「遅いぞ！リネット！」

黒鋼さんは運転席であくびをしながらそう言った。
リーネ「ごめんなさい！」
私は頭を下げてそう言った。

私は本当に役に立たずだな。
黒鋼「はぁ～！早く乗れ！」
黒鋼さんが運転席から降りて私をお姫様抱っこみたいにして助手席に乗せた。
私がまた顔を赤くしたのは言うまでもありません。

～ロマーニャ～

一時間ぐらいトラックに揺れてルッキーニちゃんの故郷のロマーニャに到着した。

黒鋼「此所か？」
黒鋼さんは腕を組ながら私に聞いてきた。
リーネ「あ、はい！此所で間違いないです！」
私はミーナ隊長から貰った地図を見ると確かに合っていた。
黒鋼「リストに何を買うんだ？」
黒鋼さんは私に聞いてきた。
リーネ「え～と、小麦粉４０？とお米６０？他にはルッキーニちゃんのお菓子とハルトマンさんのお菓子を買ってきてくださいだそうです！」

リーネ（変なのが2つ入ってる気がする！）
私がそう思っていると黒鋼さんは呆れながらこう言った。
黒鋼「変なのが2つ入ってる気がするんだが！気のせいか？」

黒鋼さんも私と同じ考えだったらしい。
リーネ「そうですね！でも買わないと怒られちゃいますね！」
私は笑顔でそう言うと黒鋼さんはこっちを向いてこう言った。
黒鋼「うちの基地には子供が多いもんな！」
黒鋼さんは少しだけ苦笑いしてそう言った。
確かにルッキーニちゃんやハルトマンさんやサーニャさんが子供かな。
黒鋼さんは頼まれた物をちゃんと見て買っていた。
黒鋼「これで全部か？」
黒鋼さんは腕を組ながら私に聞いてきた。
リーネ「あ、はい！これで全部です！」
私は慌てながらリストを見た。
黒鋼「何か腹減ったな、飯でも食いに行くか？」
黒鋼さんは私にお昼を何処で食べようか聞いてきた。
リーネ「あ、私は何でも良いですよ！」
私はそう答えた。
黒鋼「なら俺はカレーが食いたいな！」
黒鋼さんがそう言った。
リーネ「あ、前にルッキーニちゃんがオススメしてたカレー屋さんが有るみたいですよ！」
私は前にルッキーニちゃんが教えてくれたのを思い出した。
黒鋼「おい、何やってんだ！早く行くぞ！」
黒鋼さんはトラックの運転席に乗っていた。
リーネ「早いですね！」
私は少しだけ苦笑いしてそう言った。

～カレー屋～

トラックに揺れて１０分ルッキーニちゃんが教えてくれたカレー屋さんに到着した。
リーネ「此所ですね！名前はサンアロハ？」
変わった名前だなと私は思った。
黒鋼「何処かで見た事のある店だな！」
黒鋼さんは店の看板を見ながらそう呟いた。
？「おい！あんたら俺の店で何ボーと見てんだ！」
私と黒鋼さんは後ろを振り向いた。
リーネ「あの、貴方は？」
私が男の人に誰なのか聞いた。
？「俺はモロボシゼロ！そう言うお前らは何者だ！」
私と黒鋼さんに指を指すゼロさんに黒鋼さんは睨みながらこう言った。
黒鋼「俺は黒鋼！只単にカレーが食いたかっただけだ！！」
腕を組ながらそう言った。
リーネ「え～と、私はリネット・ビショップです！」
私はびくびくしながら自己紹介をした。
ゼロ「成る程な、飯が食いたいないならそう言えよ！」
ゼロさんは店に入った。
ゼロ「親父！客だぜ！」
そこには少しだけ老けた夫婦がいた。
～黒鋼～
あのゼロって言う男かなり鍛えられてるな。
？「いらっしゃい！悪いなうちのバカ息子が喧嘩腰で言ってきてしまって！」
ゼロの父親が俺に頭を下げてそう言った。

黒鋼「気にすんな！俺は慣れてるから！」
俺はゼロの父親にそう言った。
？「自己紹介がまだだったね、俺はモロボシダン！こっちは妻のモロボシアンヌ！」
奥さんの自己紹介までした。
アンヌ「お待たせ！え～と、リネットさんがシーフードカレーで、黒鋼さんがダイナミックカレーの中盛りね！」
頼んだメニューが来たので俺は早めに食った。
黒鋼「ごちそうさま！」
両手を合わせて俺はそう言った。
すると俺の椅子の隣にいたゼロがこっちを向いてこう言った。
ゼロ「おい、黒鋼俺と勝負しろ！」
いきなりの勝負と言ってきたので俺は呆れながらダンにこう言った。
黒鋼「あんたの教育間違えたんじゃないのか？」
ダンは何も言わずに俺にこう言った。
ダン「ゼロに勝ったらカレーの代金はタダにする！」
俺は呆れながらイスから立った。
黒鋼「うし！相手してやるか！」
俺とゼロは外に出て互いに構えた。
ゼロ「行くぜー！！うらー！！」

ゼロはパンチを打ち出した。
黒鋼「あまい！」
俺は攻撃を全て避けた。
ゼロ「何で攻撃が当たらないんだよ！」

ゼロは蹴り技に切り換えたがもちろん当たるわけがない。
黒鋼「おいおい、それで全力か？」
俺は上から目線でそう言った。
ゼロ「舐めるな！」

ゼロは腰から何かを取り出した。
ゼロが取り出したのは鉄でできた2つのブーメランみたいな物体だった。
ゼロ「行くぜー！！うおおおお！」
パンチに比べると早くなっている。
黒鋼「あまいな！」
俺の正拳と回し蹴りがクリティカルヒットした。
黒鋼「どうだ？もう終わりか？」
俺は少しだけ不気味な笑みを浮かべてそう言った。
ゼロ「ぐ、ガハ！」
かなりダメージが有ったのかゼロは立ち上がることが出来なかった。
リーネ「あの、ゼロさん！大丈夫ですか？」
リネットがゼロを心配して近づいた。
ゼロ「触んな！ウィッチの手なんか借りるかよ！お前ら見たいな軍の人間に俺達の辛さが解るか？ネウロイが何時攻めてくるか解らないのを我慢しながら暮らす日々！お前達に解るか！」

ゼロはリネットにいや軍に対する自分の気持ちを全て吐き捨てた。
ゼロ「だから、テメーらは死ね！」
ゼロはブーメランをリネットに目掛けて投げた。
リーネ「きゃあ！」
～リーネ～
私は強く目を閉じた。
すると私の頬に何かの液体が飛んできた。
黒鋼「大丈夫か？リーネ？」
リーネ「え？黒鋼さん？」
黒鋼さんが右手でゼロさんの攻撃を受け止めていた。
リーネ「黒鋼さん！血が！！」
私はびくびくしながら黒鋼さんの心配をした。
黒鋼「気にすんな！」

黒鋼さんは愛想の無い顔でそう言った。
黒鋼さんは怖い顔でゼロさんの方を向いてこう言った。
黒鋼「ゼロ！お前は俺の仲間を殺そうとしたな！死ぬ覚悟はできたか！」
黒鋼さんが走りだした。
その早さはシャーリさんより十倍以上早かった。
ゼロ「な、何！」
黒鋼さんはゼロさんの腹部に回し蹴りと踵落としを決めた。
黒鋼「今のは、リネットの怖いと思った気持ちだ！！そしてこれは俺の痛みだ！！」
黒鋼さんは右手が赤く燃えていた。
ゼロ「な、何だそりゃ！」
ゼロさんは驚いて恐怖していた。
黒鋼「喰らいやがれ！マグマパンチだ！！」
黒鋼さんはアッパーカットでゼロさんの腹部に思いっきりめり込んでいた。
ゼロ「ガハ！？強過ぎる！！」
ゼロさんはそのまま気絶してしまった。
黒鋼「お前が弱すぎるんだよ！心がな！」
黒鋼さんは少しだけ悲しそうな顔をしていた。
ダン「悪いな、ゼロは強い奴と闘うのが好きでな！だが、優しさと言うものを知らなかったからな！」
ダンさんが黒鋼さんにそう言った。
黒鋼「まったく！俺は手を怪我したのにカレーの代金をタダにするだけかよ！」
黒鋼さんは呆れながらそう言った。
ダン「それもそうだな！ならお前にこれをやろう！」
ダンさんは奥の部屋から何かを取りに行った。

～黒鋼～

リーネ「また来ますね！ゼロさん！」
リネットはゼロに別れを言った。
ゼロ「ああ！またな！黒鋼、お前は俺が倒す！その時まで死ぬなよ！」
俺に親指を立てながらそう言った。
黒鋼「ああ！お前も誰かの為に生きてみな！」
俺はゼロにそう言ってトラックのエンジンを掛けた。
ダンから渡された鉄でできたブーメラン名前はアイスラッガーと言っていた。

～ウィッチーズ隊の基地～

リネット

基地に帰ってくるといきなりルッキーニちゃんが私の胸をまた揉んできた。
ルッキーニ「お帰り、リーネ！やっぱり大きくなってるね！」
リーネ（ルッキーニちゃん……！）
私が心の中でそう思いながら黒鋼さんの顔を見た。
黒鋼「何だリネット？俺の顔に何か付いてるか？」
黒鋼さんは私が黒鋼さんの顔をじっと見ていたのでそれが気になってしまったみたいです。
リーネ「いえ、何でも無いです！」

私は顔を赤くしながらそう言った。
黒鋼「あ、そうだ！隊長さん！頼みたい事が有るんだ！」
黒鋼さんがミーナ隊長と話をしていた。
ミーナ「ええ！良いでしょう！但しそれを造る時は一人ではやらないでね！」
ミーナ隊長は黒鋼さんにそう言った。
何を話していたのかは解らないけど黒鋼さんは少しだけ笑いながら格納庫へ行った。
シャーリー「リーネ、黒鋼の事じっと見てるけど好きなのか？」シャーリーさんが私にそう言って来た。
リーネ「あ、いえ、そんな！」
私は慌てながらシャーリーさんに違いますと言いたいけど黒鋼さんに助けられた時少しだけ胸がドキドキしたな。
そうかもしれないかな。
黒鋼さんが私を守ってくれた時の背中が何だかとても怖かった。
でも笑顔の黒鋼さんは少しだけカッコ良かった。
私も黒鋼さんみたいに誰かを守り続けるウィッチになりたいな。

続く

二話で主人公が使用した技と魔法

バリバリボール！！
元々は骨翼超獣バジリスが翼から放つ雷属性の球、黒鋼の場合は指から放つ事が出来る。

さらに相手に当たるまで追いかけてくる誘導弾並のしつこさ。

速さは５００？

全力で放つと３００ｍ級のネウロイを破壊することが出来る。

マグマパンチ
元々は超古代怪獣ファイヤーゴルザが右手からマグマエネルギーを右拳に集中して相手を殴り飛ばして爆死させる程の力を持っている。

黒鋼はマグマエネルギーが使えないので炎の魔法でそれをカバーしている。

ゼロに攻撃した時は一割の力で発動していた。

全力なら遠距離の敵に竜巻の様な炎で敵に巻き付き一気に相手の体に拳をぶつける。

三話　勇気を持って

〜黒鋼〜

黒鋼「ふぅ、あともうちょっとで完成する。」
俺はミーナ隊長に無理言って格納庫で戦艦を作っている。
ちなみに昨日からあまり寝ていない。
黒鋼「うし、あとは七番ケーブルと九番ケーブルを一つにすれば完成だな。」
青いケーブルと赤いケーブルをくっ付けて何とか完成した。
全長は４０ｍでスピードは最高出力はマッハ３０まで飛べる。
主に使うのは会議やウィッチーズ隊の援護ぐらいだ。

？「でっかいな。」
？「かっちょいい！」
後ろから声が聞こえた。
この声は確か…。
黒鋼「何か要か？シャーロット・Ｅ・イエーガ中尉、そしてフランチェスカ・ルッキーニ少尉。」
俺はまた殺気を出しながら二人に聞いた。
シャーリー「何って、お前が何か作ってるからそれを見に来ただけだよ。」
シャーリーは俺にそう言った。
ルッキーニも同じだった。
黒鋼「そうか、なら邪魔になるからどっかに行ってろ！」
俺は睨みながらシャーリーとルッキーニにそう言った。
シャーリー「いいじゃんか、減るもんじゃないし。」
俺は武装魔法を発動した。

黒鋼「さっさと失せろ！！」
シグバルカンをシャーリーの顔に近づけて俺はそう言った。
？「黒鋼軍曹何をしているんですか？」
声のした方に振り向くとミーナ隊長と坂本がそこに立っていた。
黒鋼「っち、ミーナ隊長か？」

舌打ちしながらシグバルカンを片手に持ちながらミーナ隊長の方を向いた。
ミーナ「全く、何をしていたのかしら？」
ミーナはシグバルカンを見て何が起こったのかだいたい解ったらしい。
黒鋼「この二人が異常にうるさいからな。」
俺は人差し指をルッキーニとシャーリーに向けた。
シャーリー＆ａｍｐ；ルッキーニ「「私たちのせい？」」
自覚が無いのかこいつらは。
俺は戦艦の燃料と弾薬を取りに行った。

～渡り廊下～

走っているとリーネと宮藤を発見した。
黒鋼「おーい！二人共手を貸してくれ。」
俺は二人にそう言った。
リーネ「ん？何ですか黒鋼さん。」
リーネは俺の方を向いてどうしたのか聞いてきた。黒鋼「悪いんだが弾丸と燃料を入れるの手伝ってくれないか。」
俺は二人にそうお願いした。
宮藤＆ａｍｐ；リーネ「「構いませんよ。」」
二人の性格ならこう言うと思ったぜ。

～格納庫～

リーネ「お、重いです。」
宮藤「わ、私もだめ。」
二人は滑走路で倒れていた。
戦艦の燃料の入れ物は一つ辺り３０キロ位だ。
二人は一つしか持っていないが俺は十個も持ちながら戦艦の燃料タンクの中に注ぎ込んでいる。
黒鋼「やれやれ…」
俺は呆れながら二人の燃料の入れ物を片手で抱えながら全て入れた。
リーネ「すみません！お役に立てなくて。」
リーネは頭を下げながらそう言った。
宮藤「私も役に立てなくてすみません！」
宮藤も同じ様に頭を下げてそう言った。
黒鋼「気にすんな、後は弾丸を入れ終わったら終わりだ。」
俺は二人にそう言って弾薬を取りに行った。

～リネット～

凄いな黒鋼さんは私よりも新人の筈なのに。
リーネ（シャーリーさん見たいに足が速いし、バルクホルン大尉見たいに力持ちだし。）
私がそう思いながら弾丸を運んでいる黒鋼さんを見ていた。
黒鋼「これで終わりと。」

黒鋼さんが終わりと言ったので私と宮藤さんは地面に倒れた。
リネット「疲れました。」
宮藤「私も。」
何だか私と宮藤さんて似た者同士かな。
黒鋼さんは礼を言って何処かへ行ってしまった。

〜黒鋼〜

あの二人の体力が無いのにはかなり呆れたぜ。
黒鋼（此処のウィッチ達の名前は覚えたが一人だけ見てない奴が居たな。）
夜間哨戒のウィッチで名前は確かサーニャ・V・リトビャクだったな。
どんな奴か気になるが何時か会えるだろ。
俺はかなりの疲れが有ったので自分の部屋に戻った。
黒鋼「ふあああ！」
あくびをしながらベットで横になりそのまま夢の世界へ。

〜サーニャ〜

サーニャ「ふぁぁぁ。」
私は夜間哨戒の任務が終って自分の部屋に戻った。
衣類や下着を地面にぐちゃぐちゃに置きっぱなしにしたままベットに潜り込んでそのまま夢の中へ。

～黒鋼～

黒鋼「よく寝たぜ。ふあああ！」
しかし久しぶりに変な夢は見なかったな。
俺はラジオ体操の第一から三までやり終えてベットをきちんと直そうと思った。？「う、ん？」
さっき何か人の声がしたよな。
俺はおそるおそる布団を捲った。
サーニャ「すー、すー、」
俺のベットで寝ている女の子をじっと見た。
三十秒して俺は確信した。

黒鋼「夢だ、うん！きっと夢だ！」
俺は自分にそう言い聞かせて戦艦の飛行訓練に向かった。

～サーニャ～

サーニャ「ん？ふぁぁぁ。」
何時間寝てたのか解らないけど私は窓の外を見て解った。
窓の外はもう太陽が沈み夕方に入ろうとしていた。
それと何故か解らないけど私は知らない人の部屋で寝てしまったみたいでした。
サーニャ「扶桑刀？」
扶桑刀を使うウィッチは坂本少佐以外誰もいない。
私は畳んであった服を着て何時ものように食堂に向かった。

～宮藤～

私は今日坂本さんの訓練をしてペリーヌさんやバルクホルンさんに
「お前は足手まといだ。」と言われてかなりショックを受けました。

黒鋼「何やってんだ宮藤？」

黒鋼さんが私の後に立っていた。

～１０分後～

黒鋼「成る程な、それで落ち込んでるのか？」
私は頷いた。
黒鋼「宮藤、誰だって始めてうまくいくもんじゃないんだ。」
黒鋼さんは空を見上げながらこう言った。
黒鋼「お前は無限の可能性がある、だから諦めるな。」

？「宮藤さん、黒鋼さん？」
今度はリネットさんがやって来た。
リネット「此所私のお気に入りの場所なんです。」
リネットさんはそう私と黒鋼さんに言った。
黒鋼「成る程な確かに絶景だしな。」
黒鋼さんは風を浴びながらそう言った。
リネット「宮藤さんと黒鋼さんは凄いです。」
私と黒鋼さんが凄いって何処が凄いんだろ。
黒鋼「何が凄いんだ？」

黒鋼さんがリネットさんに聞いた。
リネット「宮藤さんは最後まで諦めないところ、黒鋼さんは何でもこなしてしまうところです。」
宮藤「通知表にも書いてあった。」
私がそう言うと黒鋼さんは腹を抱えて笑っていた。
黒鋼「悪い、悪い。んで俺達が少しだけ上に見えたわけか？」

黒鋼さんは笑いを堪えながらそう言った。
リネット「私は皆の役たたずだし、何をしてもダメなんです。」
そうリネットさんは自分に言った。
黒鋼「二人共、耳をすましてみろ。」
私とリネットさんは耳に手を当ててみた。
すると何か耳の中から音楽が流れてきた。
『落ちていく砂時計ばかり見てるよ

逆さまにすれば　ほら　また始まるよ

刻んだだけ　進む時間に　いつか僕も入れるかな

君だけが過ぎ去った坂の途中は

暖かな日だまりが　いくつもできてた

僕一人がここで優しい暖かさを思い返してる

君だけを　君だけを

好きでいたよ

風で目が　にじんで

遠くなるよ

いつまでも覚えてる　何もかも変っても

ひとつだけ　ひとつだけ　ありふれたものだけど

見せてやる輝きに満ちたそのひとつだけ

いつまでも　いつまでも　守っていく

肌寒い日が続く　もう春なのに

目覚まし時計より早く起きた朝

3人分の朝ごはんを　作る君が　そこに立っている

君だけが　君だけが

そばにいないよ

昨日まで　すぐそばで

僕を見てたよ

君だけを　君だけを　好きでいたよ

君だけど　君だけど　唄う唄だよ
僕たちの　僕たちの　刻んだ時だよ
片方だけ続くなんて　僕は嫌だよ

いつまでも覚えてる　この街が変わっても
どれだけの悲しみと出会うことになっても
見せてやる本当は強かった時のこと
さぁ　行くよ　歩きだす　坂の道を』
とても綺麗で幻想的な曲だな。

〜黒鋼〜

黒鋼「勇気が出たなら行くぞ！」
俺は二人にそう言って銀龍を片手に基地に戻った。
リネット「あの、黒鋼さんは大切な人っていますか？」
意外な質問だな。
黒鋼「いねーよ」
俺は手をポケットに入れながらそう言った。

～次の日～

今日の昼に大型のネウロイが出現した。
出撃したウィッチは坂本、ペリーヌ、バルクホルン、ハルトマン、ルッキーニ、シャーリーの６人が退治に向かった。

宮藤「行っちゃたね。」
宮藤はリネットにそう言った。
黒鋼「みたいだな」
俺は頭を掻きながらそう言った。
黒鋼「なぁ、今の俺達に出来る事って何だ？」
俺はリネットに聞いた。
リネット「役たたずの私に出来ることなんて…」
そう言ってリネットは基地に向かって走り去った。
宮藤「リネットさん。」
あいつの背中を見たら何かに押し潰されそうになっているように見えたな。
ミーナ「黒鋼さん、宮藤さんちょっと良いかしら。」
ミーナが俺と宮藤に声をかけてきた。
ミーナはゆっくりと話してくれたリネットが何故自分を役たたずだと言ったのか。

ミーナ「リーネさんはこのブリタニアが故郷なの、そのせいでプレッシャーに押し潰されて本来の力がうまく使えないの。」
黒鋼「成る程な。」
昔の俺と同じだな邪神に心を売ってしまいそうになった俺みたいに。
ミーナ「宮藤さんと黒鋼さんはどうしてウィッチ隊に入ろうと思っ

たの？」
ミーナが俺と宮藤に聞いてきた。
宮藤「私は困ってる人を助けたくて。」
黒鋼「俺は宮藤と一緒だ。」
そう俺と宮藤は言った。
ミーナ「ふふ、リーネさんが入隊した時も同じことを言っていたわ。」そう言ってミーナはブリーフィングルームに来るように言われた。

〜宮藤〜

私はリネットさんが部屋にこもっていると黒鋼さんから聞いてリネットさんにこう言った。
宮藤「リネットさん、私魔法もへたっぴで何時も怒られてばっかりだし銃も…うまく使えないし、ネウロイとだって戦いたくない。でもそれで誰かを守れるなら私は闘う守るためなら。」
私はそう言ってブリーフィングルームに向かった。

〜リネット〜

私は自分の部屋から出てブリーフィングルームまで走った。

〜ブリーフィングルーム〜

ミーナ「まだ貴女にはムリよ。」

ミーナ中佐が宮藤さんと話をしていた。
宮藤「足手まといにならないように頑張ります！」
宮藤さんが真面目な顔でミーナ中佐に言った。ミーナ「訓練がまともに出来ない人を行かせるわけには行かないわ、それに貴女には射つことに躊躇いがあるの。」
ミーナ中佐が宮藤さんにそう言った。
宮藤さんが戸惑い始めた瞬間私はいきよいよく出てこう言った。
リーネ「私も行きます、半分同士でも一人分にはなります。」
宮藤「リネットさん。」
でもミーナ中佐は。
ミーナ「それでもダメよ！貴女達が来ても同じ「そう言うなよ、ミーナ。」黒鋼君！」
私の後ろに黒鋼さんが扶桑刀を右手に掴んだままそう言った。

ミーナ「はぁ、９０秒でしたくなさい！」
黒鋼さんは扶桑刀だけ持ってハンガーに向かった。

〜空中〜

ミーナ「私とエイラさんが前衛するから三人は後衛をお願いね。」
三人「「「了解「ＧＩＧ」」」」
私はどうしてか手が震えていた。
リネット「宮藤さん、黒鋼さん、私本当は怖かったんです。」
宮藤「私は今でも怖いよでも何かから逃げるのが一番怖いって私は思う！」
宮藤さんは笑顔でそう言った。
黒鋼「宮藤、リーネ、どんな事があっても下を向くな常に前だけ見てろ。」

黒鋼さんは少しだけ笑顔でそう言ってくれた。
宮藤「こっちにネウロイが来るよ！」
私は対装甲ライフルをネウロイに向かって射った。
しかしネウロイは全ての弾を避けた。
黒鋼「仕方ね～な！宮藤、リーネ！俺がウルトラ念力を使うから俺が合図を出したら一斉攻撃をしてくれ。」

黒鋼さんは少しだけ前に出て両腕をクロスして力一杯握った。
するとネウロイの動きが止まった。
黒鋼「今だ！」
そう言った瞬間に私と宮藤さんは一斉攻撃をした。
リーネ「当たれ！当たった！！」
しかしネウロイの爆発で爆風に私と宮藤さんと黒鋼さんは海に落ちた。
黒鋼「おい宮藤とリーネ大丈夫か？」
宮藤「黒鋼さん、リネットさん芳佳で良いよ。私達友達でしょ！」
宮藤さんがそう言った。
リネット「なら私もリーネで。」
私も一歩前に進めたかな。
宮藤「よろしくねリーネちゃん。」
リーネ「はい、芳佳ちゃん。」
私は笑いながら芳佳ちゃんに抱きついた。

リーネ（これからもよろしくね芳佳ちゃん。）

つづく

第三話で主人公が使用した技と魔法

ウルトラ念力
元々はウルトラセブンことモロボシダンが怪獣や宇宙人の動きを止める際に使用したと言われている。
ウルトラセブンが変身できなくなった際にレオの援護に使用したと記録に書いてあった。
黒鋼の場合も同じだがかなりのスタミナをかなり消費してしまう為滅多に使わない。

メモリーソング
黒鋼の記憶に残っている曲を相手や自分に聴かせることができる。
宮藤やリーネに聴かせた曲は時を刻む唄でした。
他にもアニソンやゲーソン等を流すが作者の気分で流しています。

第四話　大地を守る龍

～バルクホルン～

バルクホルン「……く」
私は火の海になったカールスランとの街を見下ろした。
破壊したのはネウロイに私はＭＧ４２で迎撃した。
バルクホルン「うおおおお！」
ＭＧ４２の弾丸がネウロイに直撃してネウロイのコアが見えた。
そこに集中して攻撃した。
バルクホルン「はぁはぁ、」
息を荒くして下を見ると私の妹のクリスが泣いていた。
ネウロイの残骸がクリスの頭上に落ちてきた。
バルクホルン「クリス！」
私は辺りを見渡すと自分の部屋だと確信した。
バルクホルン「何でまたあんな夢を」

～宮藤～

リーネ「ねぇ芳佳ちゃん聞いたカルハバ基地が迷子の為に出動したんだって。」

リーネちゃんが嬉しそうにそう言った。
宮藤「へぇーそんな活動もするんだ凄いねー」
リーネ「うん、たった一人の為にね。」
宮藤「でもそうやって一人を守らないと皆を守るなんて無理だもんね。」
私はそう思いながら誰かを守ろうと心にそう誓った。
バルクホルン「誰かを守るなど所詮は夢物語だ。」
後ろにバルクホルンさんが何かを言い残して朝食のトレーを持って自分の席に向かった。
黒鋼「お前等口動かす前に手を動かせ」
黒鋼さんは使った食器のかたずけをしていた。
そして皆が集まって食事しているとバルクホルンさんだけ食事に手も着けなかった。

すると何処からか誰かの視線を感じた。
黒鋼「どうした？芳佳」黒鋼さんが私に聞いた。
私は辺りを見渡したけど見てる人なんていなかった。
宮藤「誰かの視線を感じたんだけど、気のせいかな？」

ルッキーニ「おかわり。」
ルッキーニちゃんがお皿を片手にそう言った。
宮藤「あ、はーい！！」
私はルッキーニちゃんのお皿にポテトサラダを入れに行った。

宮藤「あの、お口にあいませんでしたか？」
私はバルクホルンさんのお皿を見てそう言った。
バルクホルンさんはトレーを厨房に持っていった。
ルッキーニ「おかわり早く。」
宮藤「あ、はいはい。」
私はルッキーニちゃんのお皿にポテトサラダを入れようとしたらペ

リーヌさんが納豆を食べれた物じゃないと言った。
宮藤「納豆は体に良いし坂本さんも好きだって言ってました。」
ペリーヌ「坂本さんですって少佐とお呼びなさい、私だって…とにかくいくら少佐がお好きでもこの匂いだけは我慢できませんわ。」
そう私に言った。
ルッキーニ「おかわり！」
ルッキーニちゃんは涙目になりながらお皿を手で前に出しながらそう言った。

～黒鋼～

俺は今宮藤とリーネと一緒に洗濯物を干していた。
するといきなり強い風が吹き上げた。
風を起こしたのはバルクホルンとハルトマンだった。
宮藤「うわ、すごい！！」
宮藤はバルクホルンとハルトマンの飛行テクニックに感心していた。
しかしバルクホルンが一瞬宮藤の方を向いた気がしたが俺の見間違いか。
黒鋼「洗濯終了。」
俺は洗濯かごを見ながらそう言った。
俺は暇になってしまったので格納庫で作った戦艦のプログラムの修正のために格納庫に向かった。

～格納庫～

黒鋼「よし、こんなもんだな。」

プログラムに異常は無かった。
黒鋼「しかし、俺も物好きだな。特撮の戦艦を1から作って最後まで仕上げたんだからよ。」
戦艦の武装を1から調べたのは苦労した。
黒鋼「ん？」
俺はふと画面に何かの影が写った。
黒鋼「まさか…」
俺はデスクのキーボード押した。
すると写し出されたのはハルトマンとルッキーニとシャーリーだった。
黒鋼「あいつら。」
俺はあの三人がこの戦艦を壊す可能性があると思い面倒くさいが探すことにした。
三人が何をしようとしているのか察しはつく。
暇になったハルトマンとルッキーニが戦艦に乗り込みシャーリーも暇潰しに乗り込んだと言ったところだろう。
黒鋼「やれやれ、探すとしますか」
俺は銀龍を片手に持ちながら三人を探した。

〜ハルトマン〜

ルッキーニ「見た事のないのがたくさんあるよシャーリー。」
ルッキーニがシャーリーにそう言った。
シャーリー「確かにな、これだけでかい戦艦をあいつ1人で作るとはな。」
私もすごいと思うけどあんまり興味が沸かないな。

ハルトマン「それにしてもさ、格納庫の中に有った部品でここまで作れるものかな？」
私が二人に言うと二人は首を降った。
ルッキーニ「それにしてもさ部屋まで有るなんて凄いよね。」
ルッキーニは目をキラキラしながらそう言った。
シャーリー「確かにな。」
私達は最後の部屋に入った。
黒鋼「お前らな！」
そこには黒鋼が指をポキポキ鳴らしながら私達を待っていた。
三人「「「げげ、」」」
黒鋼の説教を後で受けたのは言うまでもない。

～ミーナ～

黒鋼君が1人で作った戦艦名前は［スペースペンドラゴン］私達が何処かに行きたい時に運転してやるって言ってたけど本当に運転してくれそうね。
坂本「ミーナ、あいつが作った戦艦を見てたのか？」
私の隣に美緒がやって来た。
ミーナ「ええ、彼が作り出した機体を見てたの。」
彼が描いたのか機体の真ん中にウィッチーズ隊のエンブレムが描いてあった。
坂本「我々はあいつの事を本当の仲間と認めてやるしかないな！」
美緒が少しだけ嬉しそうにそう言った。
ミーナ「ええ」
私も美緒と同じ気持ちでそう言った。

～バルクホルン～

あの時もしも黒龍がクリスを助けていなかったらクリスは今頃死んでいたかまたは意識不明になっていたのかもしれない。
黒鋼「よう、スーパーエース」
扶桑の新人が私に挨拶をしてきたが私は無視した。
黒鋼「おい、何で無視すんだ？」
私の右手を掴んでそう言ったが私はその手を振りほどいた。
バルクホルン「悪いが、一人にさせてくれ。」
私は冷たくそう言った。
黒鋼「何かあったら相談に乗るぜ。」
新人はそう言って何処かに行った。
バルクホルン（変わり者だな。あいつは）
私はそう思いながら自室に向かった。

～宮藤～

黒鋼さんが夕食の手伝いをしてくれたので早く夕食の準備が出来た。
黒鋼「これで全部だな。」
今日のメニューはカレーライスと野菜サラダとデザートに黒鋼さんが作ってくれたアイスケーキの三品を黒鋼さんは席に並ばせた。並べ終えて始めに来たのはルッキーニちゃんとハルトマンさんが来た。
ルッキーニ「アイスクリームだ！」
ルッキーニちゃんとハルトマンさんは目をキラキラさせながらアイ

スケーキを見ていた。
二分ぐらいして他の人達も現れた。
夕食を食べ終えて食器のかたずけをしている黒鋼さんの背後からルッキーニちゃんが抱き着こうとしたけど黒鋼さんの殺気が出ていたのですぐに逃げた。
黒鋼「俺そろそろ寝るわ。」
眠そうにあくびをしながら皆に「おやすみ」と言って黒鋼さんは自分の自室に向かった。

〜バルクホルン〜

ミーナ「電気も点けないで、妹さんの事でも考えてた？」
ミーナが私の考えていることを言い当てた。
さすがだな。

バルクホルン「私のせいでクリスに怖い思いをさせてしまった。」
私は自分のやった罪をミーナに言った。
ミーナ「敵の進行を遅れさせて時間を創ったわ。」
バルクホルン「故郷を守れなかったのは事実だ！」
私は手を強く握りしめてそう言った。
ミーナ「それは貴女だけじゃないわ。」
バルクホルン「すまない。」
私だけじゃないミーナやハルトマンも同じ気持ちだ。

ミーナ「そうだ、休暇もたまってるし妹さんに会いに行ったら？」
ミーナが私にそう言った。
バルクホルン「いや、その必要はないクリスの知っている姉はあの

日死んだ。次の戦闘にも出してくれ。」
私はミーナそう言った。

〜次の日〜

〜黒鋼〜

ミーナ「あ、黒鋼君頼みたい事があるの。」
俺が銀龍の手入れを部屋でしていたらミーナがやって来た。
黒鋼「ん？」
話の内容は訓練に参加してほしいとの事だった。
黒鋼「俺は構わないが。」

〜滑走路〜

ドラゴンウイングを背中に生やして飛ぶ準備は完全に出来た。
坂本「今から編隊飛行の訓練を始める、ミーナの二番機に黒鋼！私の二番機にリーネ！バルクホルンの二番機に宮藤が入れ。」
宮藤は戸惑いながらバルクホルンを見た。
坂本「宮藤、返事はどうした？」
宮藤「は、はい！」
宮藤は坂本に返事を返した。
坂本「二番機は常に一番機の後に付いて行くんだ、良いな！」
俺達は「はい」と大きく返事をした。
いきなり警報がなり始めた。
坂本「ネウロイか？」

場所をはグリット東０７地域と書いてあった。

～グリット東０７地域～

ネウロイの姿が見えてペリーヌとバルクホルンが突撃した。
俺はミーナの近くで指示を待った。
少ししてミーナがバルクホルンが可笑しいと言った。
黒鋼＆リーネ「「え？」」
ミーナ「バルクホルンよ、彼女は何時も視界に二番機を入れているのに今日はそれがない。」
俺とリーネにネウロイがビームを放つ赤い模様に向かって攻撃してと命令をした。
黒鋼「ああ！ヒッポリトファイヤーボム！」
リーネ「はい！」
二つの攻撃がネウロイの模様に直撃した。

するとネウロイは一斉にビームを放った。
近くに居たバルクホルンとペリーヌはシールドで何とか防御できたがペリーヌはビームの威力に吹っ飛びバルクホルンに当たりネウロイのビームがバルクホルンに直撃した。
ペリーヌ「大尉！」
宮藤「バルクホルンさん！！」
宮藤とペリーヌがバルクホルンの所へ向かった。
黒鋼「仕方ね～な！」
俺もバルクホルンの元に向かった。
ペリーヌ「私のせいだどうしよう！」
ペリーヌは自分のせいだと言い続けた。
黒鋼「ペリーヌ！お前は坂本の所へ行け！ここは俺と宮藤で充分だ。

」
ペリーヌは戦場に戻った。
黒鋼「宮藤、お前の治癒魔法で何とかなるか？」
俺は宮藤に聞いた。
宮藤「はい！」
宮藤の目は「やれます」と言う目だ。
黒鋼「なら頼むぜ！！」
俺はネウロイのビームを銀龍で弾き返そうとしたが威力がけた違いだった。
黒鋼「仕方ない。あれを使いますか。」
俺は首にかけていた勾玉を額に当てた。
黒鋼「光よ大地を守りし魂よ俺に力を貸せ！」
俺は大声そう言った。
体に光が集まり俺の龍に変身できる魔法を発動させた。
黒鋼「これが俺のもう一つの姿、ミズノエノリュウだ！」
巨大な龍へと俺は変身した。
宮藤「黒鋼さん？」
宮藤は俺を見ながらそう呟いた。
黒鋼「何やってんだ、バルクホルンの治療を続けろ！」
俺は龍のままそう言った。
バルクホルン「あの時の龍はお前だったのか？」
バルクホルンは宮藤の治療を受けて回復したバルクホルンはＭＧ４２と機関銃を持ちネウロイのコアを破壊した。
その後ミーナに頬を叩かれて妹に会いに行くと言った。

～バルクホルン～

バルクホルン「あいつに何時か礼を言わないといけないな。」私はドアを閉めて小さくありがとうと言った。

つづく

第五話　早い、凄い、冷たい！！

～黒鋼～

～格納庫～

今俺は新しい銃の製作をしていた。
黒鋼「うし、完成した。」

俺の新たな武器［シグバルカン改］普通のシグバルカンよりも軽く弾はリーネのボーイズライフルの弾に近い。
破壊力はリーネのボーイズライフルと同じぐらいだ。
？「何を作っているの？」
後ろから誰かの声が聞こえた。
黒鋼「何だ隊長さんか？」
俺はシグバルカン改のネジを全て閉め終えてからミーナの方を向いた。

ミーナ「貴方が何か作っていたから気になってね。」
黒鋼「俺が何を作ろうと俺の勝手だろ。」
俺はミーナにそう言って自分の部屋に戻った。

～バルクホルン～

あいつがクリスを助けてくれたとはな。
何時かありがとうと言わないといけないんだろうが。

バルクホルン「恥ずかしいな、やはり」
私はそう呟きながら自分の部屋に向かっていた。
黒鋼「よう、バルクホルン！」
後ろに黒鋼がいた。
バルクホルン「く、く、黒鋼！」
私はいきなり黒鋼が居たのに驚いた。
黒鋼「どうした、顔が赤いぞ？」
バルクホルン「なんでもない！」
私は黒鋼にそう言った。
黒鋼「なら良いんだが。」
私は早歩きで自室に向かった。

～黒鋼～

黒鋼（バルクホルンの奴本当に大丈夫なのか？）
俺は腕を組ながらそう思った。

黒鋼「明日はペンドラゴンの飛行訓練でもしてみるか。」
俺はそう言って自分の部屋に向かった。
部屋は何も置いていない。
元々持っていたのは銀龍と勾玉だけだったからだ。
俺はベットに入り明日に備えて眠った。

～次の日～

俺は目が覚めて銀龍と勾玉を持ってペンドラゴンが置いてある格納

庫に向かった。

～格納庫～

黒鋼「ん？」
俺は何時もより騒がしい音に気づいた。

宮藤「あれ？黒鋼さん、どうしたんですか？」
後ろに芳佳とリーネがそこにいた。

黒鋼「いや、さっきの騒音が聞こえたからハンガーに行こうと思ってな。」
俺は嘘偽りなく二人にそう言った。

俺は気になったので走り出した。

～ハンガー～

ハンガーに着くとそこにはストライカー履いているシャーリーしか居なかった。
シャーリー「よう、どうしたんだ？」

手を振りながらシャーリーはストライカーの改造をしているようだった。
俺自身はストライカーに興味がないので話を聞く気には全くなかった。

シャーリー「これのことか？」
履いていたストライカーを指差して聞いてきた。
宮藤「何を改造したんですか？」
シャーリーは宮藤にこう言った。
シャーリー「ん？スピード！」
こいつは呆れる程のスピードマニアとミーナから聞いたことがある。

天井から人の気配を感じるのだが誰かすぐに分かる。
黒鋼「早く降りてこいよ、ルッキーニ。」
俺は頭を掻きながら天井にいるルッキーニにそう言った。
ルッキーニは俺を見ると何故かビクビク奮えているのだが何故かは分からない。

少ししてルッキーニはやっと降りてきた。

～宮藤～

ルッキーニちゃんの怖いものは黒鋼さんなんだ。
でも黒鋼さんは優しいし何だかお父さんみたいな所とか有ったな。
前に黒鋼さんが私の頭を撫でてくれた時にとても暖かかったな。
あの時の黒鋼さんの顔が少しだけ赤かった気がしたような気がする。

～黒鋼～

シャーリーが俺達に見せたい物が有ると言うのでハンガーの外に出た。

黒鋼「ここら辺で見てれば良いのか？」
俺がシャーリーに聞くとシャーリーは頷いた。
シャーリーはストライカーを履いて空へと飛んでいった。
速度が何れぐらいか確めるためだと言っていた。
リーネ「黒鋼さんも飛ぶんですか？」
リーネが俺の背中を見てそう言った。
黒鋼「ああ！」
俺の限界を試してみるためだ。
背中にドラゴンウイングを力強く羽ばたかせて飛んだ。

宮藤「わぁー、黒鋼さんも早い！！」
俺は今ドラゴンウイングの最高速度は７９５？だ。
しかしこんなのはウォーミングアップ程度だ。

黒鋼「リミッター解除！」
ドラゴンウイングが黒から銀色に変わった瞬間俺の潜在能力がパワーアップした。
ルッキーニ「は、早いシャーリーよりも早いよ。」
今の時速は１９００？これでもまだ序の口だ。
本当の力を出せばマッハ２０は簡単に出せる。
だがシャーリーが目指している速度を俺が越えたら意味がないな。
宮藤「黒鋼さん、すごかったです。あんなに早く飛べるなんて」
芳佳とリーネは目を輝かせながらそう言った。
俺自身はスピードにはあまり興味がない。
俺の目指すものは誰にも負けない事だ。
黒鋼「疲れたから先に基地に戻るわ。」
俺は手をぶらぶらしながら四人にそう言った。
ドラゴンウイングを本気で使うと体力を消費するので滅多に本気では使わない。
それにしても今かなり眠くなってきた。

次は絶体に使いたくないな。
どんなことがあっても。

～シャーリー～

隊長の言った通りだ。
あいつの背中に天使みたいな翼が生えてたけどあそこまで早く飛べるなんてうらやましいな。
あいつ自身はかなり疲れてるみたいだったけど。
シャーリー「あたしももっと早く飛んでみたいな。」

宮藤「シャーリーさんは何処まで早く飛びたいんですか？」
宮藤は私にそう質問をしてきた。
シャーリー「そうだな、何時か音速、マッハを越えることかな。」
私の今の目標はこれだ。
宮藤「え？音速て何れぐらいの早さなんですか？」
シャーリー「音が伝わる速度だよ大体１２００？かな。」
私は自分の目標を二人に話した。
リーネ「そんな速度を出すことが可能なんですか？」
シャーリー「さあね、でも夢をあきらめたらそこでおしまいさ。」
私は二人にウインクしてゴーグルをストライカーの横に掻けた。

シャーリー「ところで二人は私に何かようかい？」
二人は今思い出したと言う顔をして明日の訓練の場所を教えてくれた。

～黒鋼～

次の日の朝に2人が起こしに来た序に今日の訓練は海ですると言っていた。
俺は頭を掻きながら2人に付いていった。
黒鋼（海に行くの何年ぶりだろう。）
そう思いながら銀龍を片手で持ちながら他の奴らと一緒に海へと向かった。
～海～

砂浜ではルッキーニとシャーリーが楽しそうに海を泳いでいた。
バルクホルンも泳ぐのはかなりのものだがハルトマンはいぬかきで泳いでいた。
宮藤「な、何でストライカーを履いて海に入るんですか？」
声のした方を見ると宮藤とリーネの足にはストライカーが装着してあった。
俺も暇潰しに近くで見たが偽物のストライカーであった。
坂本「何度も言わせるな！万が一海上に落ちたときの訓練だ！」
坂本は竹刀を持ちながらそう言った。
ミーナ「他の人達もやったから次は貴女達の番なのよ。」
人を殺せそうな笑みで言うミーナに俺は少しだが恐怖を覚えた。
坂本「つべこべ言わずさっさと飛び込め！！」
2人は坂本に言われた通りに海へ飛び込んだ。
十秒経ったが全然浮いてこなかった。
黒鋼「坂本、今からあいつら探しに行っても良いか？」
俺は腕を組みながらそう言った。

坂本「仕方無いな、頼むぞ黒鋼」
俺は頷いて海に潜った。
目を閉じたままで二人を探すのは意外と簡単だった。
坂本「よーし、皆休憩だ！」
俺は二人を担ぎながら砂浜にゆっくりと寝かせた。
宮藤「遊べるって言ったのに、ミーナ中佐の嘘つき」
確かにここまで疲れたら遊ぼうにも遊べないな。
シャーリー「すぐに慣れるさ」
宮藤「シャーリーさん」
宮藤の隣にシャーリーは寝転んだ。
黒鋼「確かに慣れたら平気だもんな。」
俺は空を見ながらそう言った。
宮藤「あれ？」
黒鋼「どうした？」
宮藤「今太陽の横を何かが横切った。」
何が横切ったのか俺とシャーリーは一発で解った。
四人「「「「ネウロイ！」」」」
互いに寝ている体制なのにシャーリーは起きるのが早かった。

シャーリーはいち早くハンガーに向かった。

俺達も後を追ったが足が早くて追い付けなかった。
着いた頃にはシャーリーはすでにストライカーを履いて空の彼方に居た。
黒鋼「俺が後を追うからお前もすぐに付いてこい！」
俺はドラゴンウイングを発動してシャーリーを追った。
セーブモードのドラゴンウイングで何とかシャーリーを追うことが出来そうだがシャーリーのストライカーが前より早くなっていた。
黒鋼「ヤバイ！」
ストライカーが早くなっていると言うことはネウロイにぶつかると

言うことだ。
黒鋼「封印解除！」
ドラゴンウイングの色がまた銀色に変わった。
速さをシャーリーのストライカーに合わせた。
追い付くことが出来てシャーリーに大声で「敵にぶつかるぞ」と言った。
シャーリーはやっとそれに築きシールドを発動した。
しかしシャーリーのシールドでは助かりそうに無かったため俺は氷のシールドを発動した。
ネウロイを発見した瞬間に氷のシールドをランスに変えた。
大きさは５ｍのランスでネウロイを撃破した。
基地に返り何故シャーリーのストライカーが早くなったのかすぐに解った。
ルッキーニがちょっとした事故でストライカーを倒してしまったらしい。

続く

第五話で主人公が使用した技と魔法

ＥＸドラゴンウイング
進化したドラゴンウイングで色は銀色で速さはマッハ３０も飛ばすことが出来る。しかし防御力がかなりダウンするため黒鋼は滅多に封印を解除しない。
羽ばたくときの風力は台風と同じ程の風力を持っている。

アイスシールド
その名のとうり氷のシールドで防御力は宮藤のシールドと同じ強度を誇る。

アイスランス
氷の槍で敵の弱点を一発で粉砕できるほどの破壊力を持っている。
力次第では千本のアイスランスを創ることが出来る。

第六話　一人じゃないから

～サーニャ～

サーニャ「らんららんらん♪」
私は歌を歌いながら夜間哨戒の任務をしていた。
すると中佐と少佐を乗せた戦艦スペースペンドラゴンのエンジン音が聞こえた。
運転しているのは新米の黒鋼さんという男の人。

～ミーナ～

ミーナ「不機嫌さが顔に出てるわよ、坂本少佐」
私は怒った顔をしている美緒をにそう言った。
坂本「わざわざ呼び出されて何かと思えば予算の削減だなんて聞かされたんだ。顔にも出るさ」
ミーナ「彼らも焦っているのよ、何時も私達に戦果をあげられてはね。」
坂本「連中が気にしているのは自分達の足元だけだ！！」ミーナ「戦争屋なんてあんなものよ、もしもネウロイが現れていなかったらあの人達今頃人間同士で戦い有っていたのかもしれないわ。」
私が美緒にそう言うと美緒は呆れた顔をしてこう言った。
坂本「さながら世界大戦だな。」
私はふとペンドラゴンの操縦をしている黒鋼君を見た。

彼の背中を見ているととても悲しそうな感じに見えた。
宮藤「あの、何か聞こえませんか？」
坂本「ん？ああこれはサーニャの歌だ！」
サーニャさんの歌を知っている私達は平気だけど初めて聞く人は誰が歌っているのか気になってしまうわね。

～黒鋼～

黒鋼「なぁ、サーニャってどんな奴なんだ？」
俺はペンドラゴンの操縦をしながらミーナに聞いた。
ミーナ「とっても良い子よ。歌も上手でしょ。」
黒鋼「確かに」
確かに歌も上手だな。
するとサーニャの歌がいきなり止まった。
坂本「どうした、サーニャ？」
坂本がインカムでサーニャに何かあったのか聞いた。
サーニャ「誰かこっちを見ています。」
少しだけ小さな声でそう言った。
坂本「報告は明瞭にあと大きな声でな」
坂本がサーニャにそう言った。
サーニャ「すみません、シリウスの方角に所属不明の飛行物体が接近中」
ミーナ「ネウロイなの？」
ミーナがサーニャに聞いた。
サーニャ「はい、普通の航空機の速さではありません！」
坂本「私には見えないが」サーニャ「雲の中です、目標を肉眼で確認できません」

坂本は固有魔法の魔眼で確認しようとしたが雲の中では全く意味がない。
坂本「そういうことか」
納得する坂本だがどのみちストライカーが無い三人にはどうすることもできない。

黒鋼「うし、今ペンドラゴンを自動操縦に切り換えたから俺がサーニャと一緒に戦ってくる」
俺はドラゴンウイングを発動させた。
黒鋼「サーニャ、ネウロイが何処にいるか教えてくれないか？」
サーニャと合流してネウロイが何処にいるか聞いた。
俺は両腕にワイバーンミサイルを装備した。
そしてサーニャが射った方と同じ方に連続で発射した。
サーニャ「反撃してこない…」
サーニャがそう呟いた。
俺も少しだけ疑問に思った。
だが今はそんなことよりもネウロイの破壊が先だった。

ミーナ『サーニャさんもういいわ。』
ミーナがサーニャにもう攻撃しなくてもいいと命令した。
サーニャ「ハァハァ！でも…」
呼吸が乱れながらサーニャはまだ戦えますと言いたげな目だった。
ミーナ『よく頑張ってくれたわ』
そうミーナはサーニャに言った。
俺はペンドラゴンの中にうまく入り自動操縦をＯＦＦにした。
また操縦するはめになった。
雲には俺とサーニャが開けた穴が開いていた。

他の奴等も連絡を受けて来てくれたがもう戦闘は終わってしまっていた。

俺はペンドラゴンを操縦して滑走路に着陸した。
機体の点検をしようとしたらミーナがブリーフィングルームに集まるようにと言われたので点検を後にした。

～ブリーフィングルーム～

バルクホルン「じゃあ、今回のネウロイはサーニャと黒鋼以外誰も見ていないのか？」
シャワーから上がったバルクホルンが皆に聞いた。
ハルトマン「でも何も攻撃してこなかったなんてそんなことあり得るのかな？それ本当にネウロイだったのか？」
ハルトマンはソファーで背もたれしながらサーニャに確認した。
リーネ「恥ずかしがりやのネウロイ…何て事ありませんよね、ごめんなさい」
リーネの肩が何時もよりも小さく見えた。
ペリーヌ「なら、似た者同士気でも合ったんじゃなくて？」
ペリーヌは嫌みたらしくそう言った。
黒鋼「ペリーヌ、言い過ぎだ。」
俺は腕を組ながらそう言った。
ミーナ「ネウロイとは何なのか？それがはっきりとするまではどんなネウロイが現れてもおかしくないわ」
ミーナは俺達にそう言った。
坂本「ああ、確かに仕損じたネウロイが出現する事はよくあることだ」
坂本はそう言った。
俺のいた国では同じ怪物がよく出現したからな。
ミーナ「これから訓練もかねて夜間のシフトをしこうと思うの、サーニャさん「はい」宮藤さん「は、はい！」黒鋼君「おう」この三

人が夜間の哨戒の訓練をしっかりしてね。」
そう言ったミーナは俺と芳佳とサーニャをみて言った。
宮藤「私もですか？」
宮藤はミーナに確認をした。
坂本「今回の戦闘の経験者だからな。」
坂本はそう言った。
宮藤「私は見てただけ」
エイラ「ハイハイ、私もやる！」
エイラまで一緒にやると言い出した。
ミーナ「ええ、ならエイラさんも入れて４人ね」

そうミーナは俺達にそう言った。
サーニャ「ごめんなさい、私がネウロイを取り逃がしたばっかりに…」
そうサーニャは暗い顔でそう言った。
俺はサーニャに近づいて頭を撫でながらこう言った。
黒鋼「気にすんな、ミスは誰にでもある。」
俺は今のところミスは無いけどな。
黒鋼「俺そろそろ寝るわ」
あくびをしながら皆にそう言った。

皆は呆れた顔をしながら笑顔でおやすみと言った。
自室に戻りベットに入り少しづつ眠りに入った。

～サーニャ～

サーニャ「誰にでもミスはある…」
黒鋼さんが言った言葉を言ってみた。

あんなふうに私の事を助けてくれる人は始めてかもしれない。
ぬいぐるみを抱き枕にしながら私は静かに眠りに入った。

〜黒鋼〜

次の日の朝が来て朝飯が何なのか見た。
黒鋼「おお、ブルーベリーか？」

俺がじーと見ながらリーネに聞くとリーネの実家から送られてきたらしい。
リーネ「ブルーベリーは目にとっても良いんですよ」
確かにブルーベリーが目に良いのは聞いたことがある。
ハルトマン「いっただき！」
ブルーベリーを頬張るハルトマン。
するとルッキーニが俺と宮藤とシャーリーにべーしてと言ってきた。
黒鋼「こうか？」
舌を出すと完全に紫色になっていた。
俺と宮藤とシャーリーとルッキーニは大笑いしていた。
ペリーヌ「全くありがちな事を」
ペリーヌは呆れた顔をしながらそう言った。
サーニャはブルーベリーが気に入ったのか静かに食べていた。
朝飯を食べ終わり坂本が俺達に「夜に備えて寝ろ」と言った。

〜サーニャの部屋の前〜

俺は今かなり違う意味でピンチに立たされていた。

サーニャ「黒鋼さんも夜間のチームだから私達と一緒に寝ましょう」
サーニャは俺と一緒に寝ようと言ってきた。
俺とサーニャは年が三つ離れているとはいえさすがにまずいと思う。
エイラ「サーニャ、黒鋼も困ってるし無理に誘うもんじゃないぞ。」
エイラが珍しく助け船を出してくれた。
黒鋼「エイラもああ言ってるしよ。」
俺はサーニャにそう言う。
サーニャ「エイラは黙っててて！」
サーニャがエイラにそう言った。
エイラはかなりショックを受けたのか黙ったままドアを閉めた。
たぶん体育座りをして泣いているに違いない。
黒鋼「芳佳は俺と一緒に寝るの嫌だよな？」
俺は芳佳に聞いた。
宮藤「え？別に構いませんよ。」
最後の希望の芳佳まで良いと言ってきた。
こいつらには恥ずかしいと言う心がないのか。
黒鋼「とにかく俺は自室に帰らせてもらうぜ！」
そう言って自室まで走って逃げた。

～黒鋼の自室～

黒鋼「あいつらと一緒に寝たら体がいくつ有っても持たないな。」
そう言いながらベットに入り眠りについた。

夕方になりルッキーニが大声で夜間哨戒のメンバーを全員を起こしに来た。まだ眠気が残っていたがすぐに目が覚めた。

人間の体は少しでも動けばすぐに目が覚めるものだ。

〜食堂〜

宮藤「何か暗いね」
食堂の灯りが暗いことに気づいた。
リーネ「暗い環境に目をあわせる訓練なんだって」
そうリーネは芳佳に説明した。
するとペリーヌがティーカップを俺達のテーブルの前に置いた。
宮藤「これは？」
ペリーヌ「マリーゴールドのハーブティーですわ。これも目の働きを良くすると言われてますわよ。」
始めから説明をするペリーヌ俺も暇潰しに厨房でそれにあったお菓子を作った。
宮藤「黒鋼さんこれは？」
黒鋼「ん？ブルーベリーソースのケーキだが」
暇潰しに作った菓子を皆は美味しそうに食っていた。

〜滑走路〜

宮藤「夜の滑走路がこんなに暗いなんて思わなかった。」
エイラ「夜間飛行始めてなのか？」
サーニャ「無理ならやめる？」
宮藤を心配するサーニャに少しだが母上に似ていた。
エイラ「おい、黒鋼お前何で泣いてんだ？」
俺の瞳から涙が零れ落ちていた。

黒鋼「いや、何でもない！」
俺はそう言ってドラゴンウイングを羽ばたかせて先に夜の空を飛んでいった。
雲を突き抜けると宝箱をひっくり返した感じだった。
黒鋼「やっと来たか！」
サーニャとエイラと芳佳が到着した。
三人は辺りを見渡したがネウロイの気配は全く感じなかった。

夜間哨戒の任務が終了して滑走路に着地した俺は急に目眩が起こった。
サーニャ「大丈夫ですか？」
サーニャが心配してきたが俺は「大丈夫だ」と言った。
自室に戻りまた眠りについた。

目が覚めて食堂に行くと宮藤が何かの大きめのアルミ缶を持っていた。
黒鋼「なぁ、宮藤それなんだ？」
俺は宮藤に聞いた。
宮藤「肝油です、八つ目うなぎの、ビタミンたっぷりで目に良いんですよ」
俺も始めてみたが簡単に言えば魚の油だな。
そのあと皆が肝油を飲んだがミーナ以外は不味いと言っていた。

～サーニャ～

私は今黒鋼さんの部屋の前に来た。
サーニャ（部屋には何も置いてない。）
置いてあるのはタンスとベットだけ。

私はベットに入り込んだ。
黒鋼さんの匂いが少しだけした。
その匂いはまるでお父様の匂いに少しだけ似ていた。黒鋼「何やってんだ？サーニャ？」
黒鋼さんが戻ってきていた。

～滑走路～

黒鋼さんはその後の事を聞かずに私にこう言った。
黒鋼『お前が一人で寂しいと思うなら何時でも俺の部屋に来い！』
その時の表情がどうしてかお父様に似ていた。
宮藤「ねえ、聞いて今日私の誕生日なんだ。」
宮藤さんが私と同じ日なんだと始めて知った。
エイラ「どうして黙ってたんだよ？」
エイラが宮藤さんに聞いた。
宮藤「私の誕生日はお父さんの命日でもあるの何だかややこしくて言いそびれちゃた。」
宮藤さんのお父さんの命日だから誕生日を教えれなっかたんだ。

サーニャ「宮藤さん耳をすましてみて」

～黒鋼～

インカムから何故か音楽が聞こえた。
宮藤「へぇーこんなことが出来るんだ、黒鋼さんと同じだね。」
エイラが意外と言いたそうな顔をしていた。
黒鋼「何だエイラ？」

エイラ「お前もサーニャと同じ事が出来るのか？」
エイラは俺にそう聞いてきた。
俺は頷いた。
さすがに隠す必要もないしな。

するとインカムから流れていた音楽に変化が起きた。
黒鋼「何だ？」
ジャミングとは違うしまるで何かの真似事のように歌っているよな感じだった。
宮藤「これ、歌だよ！」
まさか前に出現したネウロイの狙いは。
サーニャ「私！？」
サーニャはそう確信したのか俺達に離れるように言った。
黒鋼「サーニャ！！く、封印解除！」
ドラゴンウイングの封印を解除してサーニャの体を突き飛ばした。
サーニャに怪我はなかったが俺は右腕に直撃と右目にかすっただけだった。
黒鋼「く、」
宮藤とサーニャとエイラが心配して来たが俺は何とかドラゴンウイングを羽ばたかせた。
宮藤「黒鋼さん、大丈夫ですか？」
宮藤は治癒魔法を使おうとした。
黒鋼「宮藤、俺の治療は後でいい」
俺は左目だけでネウロイが何処にいるか確認した。
黒鋼「サーニャ、エイラ、宮藤、ネウロイはベガとアルタイルを結ぶ所にいるぞ！」
位置を教えてやる俺だが今の力ではドラゴンウイングを羽ばたくのでやっとだ。
エイラ「こうか？」
エイラは俺に聞くが俺自身は飛ぶのでやっとだ。

するとサーニャが何処にいるのか代わりに教えてやっていた。
サーニャ「もっと手前を狙って！」
三発のロケット弾がネウロイに直撃した。
勢いで出てきたネウロイに俺は光の戦士の技を使用した。
黒鋼「消え去れ！ゼペリオン光線！！」
両手をLの形にしてネウロイを破壊した。
力を使いすぎてドラゴンウイングは消滅しそのまま真下に落ちていった。
すると月の光で母上が見えた。

～医務室～

俺は目が覚めると医務室にいた。
坂本「目が覚めたか？」
俺は寝たまま頷いた。

続く

第六話で主人公が使用した技と魔法

ゼペリオン光線
ウルトラマンティガの必殺技の１つでマルチタイプ最強の必殺光線。
黒鋼がどうしてこの技を使用できるのかは未だ解っていないが光属性の魔法としか作者もわからないらしい。
空中で使用するにはドラゴンウイングの封印を解除してから放たなければならないもしも解除せずに放てばかなりの魔法力を消費してしまう。
他にもダイナやガイアの技を使うことが出来る。
タイプチェンジをすることも出来る。

黒鋼自身の場合は力を加減して使うことが多い。

第七話　ごめんなさい

～黒鋼～

坂本「ずいぶん無茶をしたようだな、黒鋼。」
寝たままの俺に聞いてくる坂本。
黒鋼「あーでもしなけりゃサーニャが殺られていた。」
俺は自分の行動について間違いはないと答えた。
坂本「お前の考えは理解できんがそのせいで悲しむ奴もいることを考えるんだな。」

坂本はそう言い残して病室を後にした。
俺は考えていた。
自分のやり方に間違いはないと。

～次の日～

右腕の痛みがまだ残ってはいたが医者は四日後には包帯を取っても大丈夫と言っていた。
ベットで横になるがかなり暇だった。
何時もはバルクホルンと世間話をするが今はそんな事ができる状態じゃない。
するとドアをノックする音が聞こえた。
黒鋼「誰だ？」
ノックしたのはストライクウィッチーズの隊長のミーナ・ディートリンデ・ヴィルケ中佐だった。

ミーナ「貴方は無茶をするのが好きね。」
俺に笑顔で問いかけるミーナ。
黒鋼「無茶は承知の上だ。」

俺はミーナにそう言った。
ミーナ「ふう、黒鋼軍曹貴方には三日程の休暇を与えます。」
ため息混じりにミーナはそう言った。
俺自身はうれしいが今は休暇など必要ではない。
黒鋼「悪いが休暇など必要じゃない！」
俺はミーナにそう言った。
ミーナ「ダメよ、休暇を取って栄喜を養いなさい。」
ブラックスマイルでそう言ったミーナに少しだが恐怖を感じた。
黒鋼「へいへい、」
俺は片手をヒラヒラさせながら返事をした。
ミーナはそれだけを言うために一人できたのだろうか？
ミーナ「あと一つ言い忘れてたわ、サーニャさんが私のせいでと自分を責めていたわ。」
そう言い残して病室を後にした。
黒鋼「マジかよ。はぁ…」

想像できなくもないがサーニャのマイナス思考ならそうなりそうだ。

俺のせいでサーニャが自分を責めていたなら謝らないといけないな。
コンコン
また誰かが俺の見舞にでも来たらしい。
黒鋼「開いてるぜ」
俺は普通にそう言った。

客人は芳佳とリーネの二人だった。
宮藤「黒鋼さんケガは大丈夫ですか？」

芳佳は俺に近付いてきて俺が無事か聞いてきた。
リーネは泣きながらいきなり俺に抱き着いてきた。
リーネ「黒鋼さんは無茶をし過ぎです。私黒鋼さんがタンカーで運ばれた時すごく心配したんですよ。」

大粒の涙を零れ落ちながらそう言ってくるリーネに俺は左手でリーネの頭を撫でた。
リーネは顔が赤くなりながら気持ち良さそうな顔をしていた。
まるで猫のように。

というよりは使い魔が猫だから当然だ。
芳佳の頭も右手で撫でてやったがかなりの激痛が走った。

しかし我慢しながら二人の頭を撫で続けた。

宮藤「黒鋼さんは自分の体を大事にしてください。」

宮藤からはそう言われた。
確かに俺は自分の体を大事にしないからな。
体に疲れがたまっていたかもしれないしな。
たまには休暇してもバチはあたらないよな。
リーネ「黒鋼さん、お願いですから休暇をとって早く右腕を治してください。」
リーネは泣きそうになりながらも俺にそう言った。
子供を泣かすのは俺の主義に反する。
俺は仕方なく頷いた。
二人は昼食の用意が有ると言うので食堂へ戻っていった。
黒鋼（サーニャの奴がどうしてるか聞いておけばよかったな。）

俺はそう思いながら窓の外を眺めていた。

窓が開いていたのでそよ風が流れてきた。
心地好い風に俺は何時しか眠りについていた。
目が覚めると夕方なのか空が赤く染まっていた。
何時もなら誰かが俺を起こしに来るもんだが誰も来ていなかった。
力の使いすぎで疲れていたとはいえストライクウィッチーズの皆を困らせたのは悪かったな。

コンコン
また誰かが来てくれたサーニャの奴がどうしてるか聞いておくか。

黒鋼「開いてる…」
来てくれたのはサーニャ本人だった。
サーニャは椅子に座り下を向いたまま黙り込んだ。
何かを喋ってくれる事を願うがさすがに無理だよな。

黒鋼「あ「ご、ごめんなさい」ん?」
俺は「お互い無事でよかったな」と言うとしたらサーニャがいきなり俺に謝った。
俺自身は謝られる理由が全くないんだが。
黒鋼「別に謝る必要はないと思うぜサーニャ。」
サーニャ「でも私のせいでケガをしたのに」
俺はため息をしそうになったが我慢をした。
目を閉じて自分の思っていることをサーニャ伝える事にした。
黒鋼「俺がケガしたのはお前のせいじゃない俺自身のせいだからな。
それに俺がケガしたからってお前のせいじゃないだろ」

俺はケガしている右手でサーニャの頭を撫でながらそう言った。
サーニャの目からは大粒の涙が零れ落ちていた。

サーニャ「…ごめんなさい」
泣きながら俺に謝るサーニャに俺は優しく抱き締めながら思った。
黒鋼（本当に優しい女の子なんだな。）
と何時の間にかサーニャは泣き疲れたのか俺の膝の上で寝てしまっていた。
　心地好い眠りについたサーニャを起こそうか迷ったが今は寝かせておくことにした。

～サーニャ～

何時まで眠っていたのか解らないけど何だか懐かしい夢を私は見ていた。
夢の内容はお父様のピアノの音に合わせて歌を歌う夢だった。
とても嬉しかった。

目が覚めるとお父様が笑顔で「起きたか？サーニャ！」と言ってくれた。
　サーニャ「おはようございます、お父様」

お父様が側に居てくれるのはすごくうれしいでも何だかまた眠気が残っていたのか私は目を擦った。
すると私が抱き付いていたのはお父様ではなくて黒鋼さんだった。
私は今自分の顔が赤くなっている。

黒鋼「俺がお父様か？」
寝言を聞いていたのか黒鋼さんは少しだけ落ち込みながら私に聞いてきた。
どちらかと言うとお父様と言うより。

サーニャ「お兄ちゃん」
黒鋼「俺の事か？」
私がつい口に出してしまったのを黒鋼さんが聞いてしまったみたいです。
でも本当にお兄ちゃんみたいなのは確かかも。
優しくて強くて暖かい。
ウゥゥゥゥ
いきなりサイレンが鳴出した。
　サーニャ&黒鋼「「ネウロイ！！」」
私はハンガーまで走り出した。

～宮藤～

今私達は11人でネウロイの撃退に向かっていた。
坂本「居たぞ！大型のネウロイだ、突撃！」
その命令にバルクホルンさんとハルトマンさんが攻撃を仕掛けた。
しかし銃弾がネウロイに全く効いていなかった。
リーネちゃんの対装甲ライフルも全く効いていない。　ミーナ「なんて固い装甲なの！」
ミーナ隊長が驚きながらそう言った。
私もこんな固いネウロイは始めて。
宮藤（黒鋼さんが此所に居たら不可能を可能にするのに！）
今の私に出来るのはシールドを張ることしか出来ない。
？『お前ら、何暗い顔してんだ！！』
インカムから誰かの声がした。
その声は私達も知っている私達の仲間いや家族の一人黒鋼さんの声だった。黒鋼さんの声はいつもより大声だった。
黒鋼「お前らに倒せない物はない。お前らは無敵のストライクウィ

ッチーズだろ？最後の最後まで諦めるな！！」
黒鋼さんのむちゃくちゃな言葉に皆は呆れていた。
坂本「ふ、当たり前だ。」
坂本さんが扶桑刀を片手にそう言った。
バルクホルン「私達は無敵のストライクウィッチーズ。」
バルクホルンさんも続けて言った。
ミーナ「ええ、私達に不可能はないわ。」
ミーナ中佐も続けて言った。
私達に不可能はないのは本当の事だ。
黒鋼『ミーナ中佐！頼みたいことがあるんだが。』
黒鋼さんはインカムでミーナ中佐と何かの話をしていた。ミーナ「何？頼みたい事って？」
ミーナ中佐は黒鋼さんが何を頼みたいのか聞いた。
黒鋼『ウィッチ二人を貸してくれないか。』
黒鋼さんは何か考えてそう言ったのは私には解った。
ミーナ中佐も解ったのか少しだけ苦笑していた。
ミーナ「ええ、解ったわ、宮藤さんとサーニャさんをそちらに向かわせるわ」
私は急いで基地に戻った。

～黒鋼～

黒鋼「来たな」
俺は右腕の包帯を解きながらサーニャと宮藤が来たのを確認した。
宮藤「黒鋼さん！まだ右腕の包帯を解いたらダメですよ！！」
俺の右腕を心配しながら宮藤はそう言った。
サーニャ「…宮藤さん治療してあげて…」
サーニャも同じような事を言っているが俺は二人に「心配ない」と

言った。
黒鋼「宮藤、サーニャ俺の体を支えていてくれ！」
俺はネウロイの居る方角を確認した。
サーニャ＆宮藤「「あ、はい」」
俺の背中を支えるサーニャと宮藤は使い魔の力を借りて支えてくれた。
黒鋼「行けー！！」
両手をL字にして放った光魔法の一つゼペリオン光線がネウロイに直撃した。
爆発の衝撃でコアが飛び出てそこを坂本が扶桑刀で真っ二つにした。
俺は喜ぶウィッチーズを見て安心して気絶した。
続く

第八話　始めての休暇（前書き）

お話はドラマＣＤです。

第八話　始めての休暇

～宮藤～

今は黒鋼さんはものすごく怒っています。

理由はミーナ隊長から今後無茶をしてはダメと言われたようです。

宮藤「黒鋼さん、まだ右腕は痛みますか？」

私は黒鋼さんに傷は大丈夫か聞いた。

黒鋼「ああ、心配ない」

何時もと変わらない口調でそう言った。

黒鋼さんはあまり私達に心を許してないような気がする。

時々私達の目を見て話さない事が多いから。

どうしたら私達と目を見て話してくれるかな。　私がそう考えながら歩いていたら黒鋼さんが何かを言ってきた。

黒鋼「宮藤！前！」

ゴン！！

壁に頭をぶつけてしまった。

かなり痛かった。

痛そうな私に黒鋼さんは近寄って大丈夫かと聞いてきた。

私は大丈夫ですと涙目になりながら頷いた。

黒鋼さんは本当はとても優しいのは他の皆も知っているのに黒鋼さんの背中を見ているとなんだか過去に取り返しのつかない事をしたような感じる。

でも黒鋼さんが笑顔の時は皆の顔が赤く染まってる。

　本当はとても優しくて皆の事をいつも思いやってくれているいい人なのに。

　どうして休暇を取らないんだろう？

黒鋼さんの変な所は休暇を滅多に取らないところ。　ミーナ隊長からも休暇を取るように言われてるのに。

〜黒鋼〜

ミーナや芳佳から休暇を取るように言われたが。
取る気はないんだよな。
この世界に来てから何かをしたいと思わないしな。

〜ブリーフィングルーム〜

ミーナ「昨日ネウロイと戦闘があったので今日は非番にします。」
ミーナが皆に報告した。
宮藤「わ〜い、お休みだ。」
だらけている宮藤に俺は呆れた。
坂本「宮藤あまりだらけるなよ。」
宮藤「はーい！」
坂本に返事をする宮藤。
俺は銀龍を片手に持ちながら街に行くために申請用紙に名前を記入した。
格納庫へ行きハルトマンとバルクホルンが乗っていたトラックに乗せてもらいロンドンに向かった。

〜ロンドン〜

芳佳とリーネと同じ場所に降りた俺は念のために銀龍を腰に指し二人が行きたいところまで付いて行った。　二人立ち止まったのは大きな雑貨屋だった。

黒鋼「バカにでかいな。」
俺が普通にそう言うと芳佳も頷いた。
リーネ「この雑貨屋さんには色々な物が置いてあるんですよ」
俺は中がどうなっているのか気になって走り出した。　中は普通のデパートと同じような感じで色々な物が置いてあった。　初めて見る物や俺の居た世界にも有ったものまで置いてあった。
芳佳は自分の家族に何かを送ろうと言っていた。
俺は暇潰しに値段を見ていた。

１０分後～

買い終わったのか芳佳の両手には大きな袋を持っていた。
　俺は芳佳の荷物を持ってやることにした。
普段鍛えているため荷物持ちは慣れている。
宮藤「黒鋼さん、大丈夫ですか？」
黒鋼「ああ、心配ない。」
片手で荷物を持つのはさすがにキツイ。
　まだ治っていない右手を使うわけにもいかない。
二人の買い物も終わり俺が行きたいところがないか聞いてくる二人に俺は頭を掻きながら本屋に行くと言った。
俺自身は出撃がないときは暇になるのでその暇潰しに本でも読んでおこうと思った。

～とある本屋～

リーネが知っている本屋に入り何を買うか選んだ。
本のタイトルを見て買った。
買った本は四冊。
一冊だけタイトルの書いていない本が置いてあったのでそれも買う

ことにした。
本はリーネが持つと言うのでリーネに持ってもらうことにした。
三人でそこら辺を歩いていると何かの店を発見した。
リーネが前に教えてくれたお菓子屋だった。
お菓子屋に入るか聞いてきたリーネに俺は腹が減っているから入ると言った。

～お菓子屋～

お菓子屋の中はかなり綺麗な店内だった。
中に入ると可愛らしい小物が置いてあった。
店員「いらっしゃいませ、申し訳ございません、只今満席で相席でも構いませんか？」
店員がそう言うので俺達は頷いた。

店員に付いていき席の方に行くと座っていたのはサーニャとエイラだった。
黒鋼「何だお前らも来てたのか？」
俺は椅子に座りエイラとサーニャにそう言った。
エイラ「わるいカ」
黒鋼「べっつに～」
少し悪い笑顔でそう言った。
宮藤「わ～その綺麗なお菓子は何？」
リーネ「芳佳ちゃんこれがこのお店のパルフェって言うお菓子なの。」
芳佳に説明するリーネ。
パルフェってもしかしてパフェの事か？

俺はブルーベリーのパルフェを一つ頼んだ。
サーニャ「ブルーベリーのパルフェも有ったんだ。」
何時もより目をキラキラさせながらそう言ったサーニャ。
俺はサーニャにブルーベリーのパルフェスプーンで食べるか聞いた。
サーニャは一口食べると言った。
小さな口でパクッと食べたサーニャに俺はほんの少しだけドキッと心が傷んだ。
今さらだが俺はこの世界に来て良かったと思っていた。
優しい仲間に出会えてこんな幸せなことは滅多に無いだろうな。
エイラ「そういや、黒鋼の誕生日は何時なンダ？」
黒鋼「ん？ああ、８月の１８日だ。」
俺がそう言うとサーニャと芳佳は「「一緒だ」」と言った。
そういやこの二人も俺と同じ誕生月だったな。
そんなことを考えていたら後ろから元気の良い声で「私の誕生日は１２月２４日！！」その声の主はルッキーニだった。
黒鋼「普通に登場しろよ。」
俺がルッキーニにそうツッコミを入れた。
「私の誕生日は４月１９日～」
宮藤「今の誰？」
芳佳の後ろにハルトマンが隠れているのが気配で解った。
黒鋼「ハルトマン！」
俺が隠れているハルトマンに声をかけるとハルトマンは悔しそうに出てきた。
ハルトマン「ちぇ、黒鋼は何でもお見通しって訳か。」
バルクホルン「当然だろハルトマン、黒鋼は目を閉じたままネウロイのビームを避ける程だぞ。」
確かに三週間前の戦いで目を閉じたままネウロイのビームを避けたことがある。
黒鋼「お前も来てたのか？」

バルクホルン「ああ、ちなみに私は3月２０日、ミーナが１１日だ。」
ルッキーニ「うにゅ、私と誕生日が近い人がいない。」
ルッキーニが寂しげに俺達に言った。
リーネ「それを言うなら私もだよ。」
悲しげな顔で言うリーネとルッキーニに俺は二人の頭を撫でた。
黒鋼「誕生日今年は祝えなかったが来年は祝おうぜ！」
二人にそう言うと二人は嬉しそうに頷いた。
ハルトマン「パルフェ一つ。え、何種類かあるの？じゃあ全部！」
バルクホルン「ぜ、全部ってお前そんなに食べられるのか？」
そんなに食えるのか俺も疑問に思いながらハルトマンはパルフェを
バルクホルンと一緒に食べていた。
パルフェを食べ終えてトラックに乗り俺が運転することにした。
バルクホルン「すまないな、黒鋼」
黒鋼「気にすんな。」
俺は気にするなと言いながら運転した。
基地に戻ると坂本とミーナとペリーヌの姿が見えた。
全員「「「「ただいま」」」」
俺達の家についてそう言った。

続く

第八話　始めての休暇（後書き）

次はどうしようかな。

第九話　貴方の記憶（前書き）

はじめはサーニャの目線です。

第九話　貴方の記憶

～サーニャ～

私と宮藤さんがお兄ちゃんの部屋で見つけた一冊の本には私達ストライクウィッチーズの皆が知っている人の事が書かれていた。

～今から3時間前～

宮藤「あ、サーニャちゃん、どうしたの？」
宮藤さんを呼んだ私は宮藤さんに相談をした。
サーニャ「宮藤さん頼みたいことがあるんだけど。聞いてくれる？」
宮藤「別に構わないよ。」
宮藤さんは了承してくれた。
宮藤「それで頼みたい事って何？」
サーニャ「うん、実はお兄ちゃんの好きな物って何かな？」
私は宮藤さんに聞いた。
宮藤「う～ん。確かお酒が好きだって前にシャーリーさんと話してるのを聞いたことがあるよ。」
お酒かお兄ちゃんが前に外でたまに飲んでるのをよく見掛ける。
それ以外は見たことが無いような気がする。
宮藤「一応本人にも聞いてみよっか」
サーニャ「うん！」
私達はお兄ちゃんの部屋に向かった。

～黒鋼の部屋の前～

コンコン。
ノックをしたのは宮藤さん。
宮藤「居ないのかな？」
サーニャ「あ、開いてる。」
中に入ると意外と片付いていた。
ベットの近くにはお兄ちゃんの愛刀の銀龍が置いてあった。
お兄ちゃんが普段から大切そうに持っているのは皆も知っている。
ドタドタ。
宮藤「うぎゃ」
宮藤さんが本棚にぶつかって本が一斉に倒れてしまった。
落とした本を一冊だけ倒れていない本があった。
その本には扶桑の文字が書いてあった。
私は宮藤さんを呼んだ。
宮藤「どうしたのサーニャちゃん？」
私と宮藤さんはその本を開いた瞬間に何処かの庭に居た。
庭の見た目からして扶桑の物と同じだった。
？「お母さん取れたよ！」
すると近くに植えていた大きな木から男の子の声が聞こえた。
木の上から下りてきた少年を見て私と宮藤さんは驚いた。
宮藤「黒鋼さん！」
サーニャ「お兄ちゃん！」
私達は驚いてそう大声で言ったのにお兄ちゃんによく似た子は私達の方を振り向かなかった。
つまり声が聞こえなかったのかそれともあの少年の耳が悪いだけなのか。
歳は私達より七歳ぐらい年下にに見えた。
私達はそう思いながらお兄ちゃんによく似た子をじっと見ていると

私達の後ろから男の人が１２人現れた。
その内の一人に私達のよく知っている人が居た。
宮藤「黒鋼さん！！」
サーニャ「お、お兄ちゃん！！」
私達は驚いた。
？「父上！」
もっと驚いたのはその少年がお父さんと言った事でした。
黒鋼？「おお、相変わらず元気な小僧だな。」
少年「小僧じゃないてば！」
怒った顔をするお兄ちゃんによく似た少年はお兄ちゃんによく似た人に怒っていた。

でもどうしてか私は違和感を感じた。
お兄ちゃんによく似た人の右手には龍の絵が描かれていた。
お兄ちゃんがよくお風呂から上がった後によくＴシャツとズボンだけで部屋に向かうとき太い腕をよく見るけどそんなものは描かれていなかった。
宮藤さんも違和感を感じたのか少しだけ落ち着きがない。
それにお兄ちゃんによく似た人の持っていた刀は銀龍ではなく坂本少佐が持っていたのと同じ物だった。
三人は家に入り何かを話していた。
？「では、また怪獣が現れたのですね？」
黒鋼？「ああ、今回現れたのはメルバだ。」
少年「メルバって超古代竜メルバ？」
３人の会話から聞いた事の無い会話がだった。
？「よく倒せたわね、空中を得意とする怪獣を」
黒鋼？「なあに、奴が急降下する瞬間に氷龍撃を放ったからな。」
少年「やっぱり父上は強い。」
少しだけど明るく笑う三人に私はどうしてか羨ましく思えた。
　私の両親は今は避難して何処かで生きていると思うけど何処に居

るのか解らない。
？「あまり無茶をしないでくださいね。」
黒鋼？「ああ」
二人の話を聞いていると本当に夫婦のように見えてしまった。
私と宮藤さんは謎に思えてた。
お兄ちゃんによく似た人とよく似た子供は一体何者なのか。
　それに私達が今まで居たのはお兄ちゃんの部屋に居たのに。
そう思いながら本のページを２ページ飛ばしてみた。するとさっきとは別の場所に私達は立っていた。
？「ハァァァ、たあ！」
後ろには見たこともない動物が倒されていた。
大きさはネウロイより小さいけど５０ｍぐらいだと思う。
それを倒したのはお兄ちゃんによく似た少年だった。だけど前より身長が高くなっていた。
　後ろに居た男の人は「お疲れ様です若。」とまるで部下と上司みたいな会話をしていた。
しかし少年の顔はちっとも嬉しそうじゃなさそうだった。
？「これじゃあダメだ。親父みたいに邪王・竜撃破で倒せなければ意味がない。」
扶桑刀を見ながらそう言う少年に私達は一体何者なのか考えていた。
　少年の目はどこか悲しそうな感じがした。
サーニャ「宮藤さん、もしかしてあの子って。」
宮藤「私も何となく解るよ。」
あの男の子の正体って。
ページを二ページ程飛ばして見ると少年は池で何か魚を捕まえようとしていた。捕まえた魚の大きさは７０センチ位だった。
その魚を何かの入れ物に入れて何処かへ走って行った。
その走って行った場所は自分の家だった。

家に着いた少年は魚を年輩の女性に渡して走り出した。
？「母さん体の具合はどうですか？」
母親を心配していたんだ。母「龍夜心配しなくても大丈夫です。」
本当に大丈夫なのか心配する男の子は自分の母親を心の底から心配していた。
時刻は解らないけど夜になり父親が帰ってきていた。
？「父上！刀が折れてる、今回現れた怪獣はそんなに強いの？」
　黒鋼？「心配するな傷の手当てを受けたらまた戦いに向かう。」
私と宮藤さんはお兄ちゃんによく似た人の右腕を見た。
右腕が完全に石化していた。
その石化した右腕から紫色の光が見えた。
その光はまるで闇の光だと私達は解った。
前にお兄ちゃんが教えてくれた。
その光があれなんだ。
お兄ちゃんによく似た人は立ち上がり長細い木の箱から何かを取り出した。
その中に入っていた物はお兄ちゃんの愛刀の銀龍が入っていた。
黒鋼？「我家の家宝銀龍で立ち向かう。」

？「やはり戦いに向かうのですね。」
　女の人が何かの葉っぱを持っちながらそう言った。お兄ちゃんによく似た人は方膝を地面に着けて銀龍を女性の前に差し出した。
？「壬を守りし龍よ私達に力をお貸しください。」
そう女性が言うと銀龍が光始めた。
その光は誰かを守りたいと言うような優しい光だった。
男の人達は怪獣退治に向かった。
少年が自分の父親の前に立ち自分も連れていってくれと言った。
　黒鋼？「お前は此所で自分の守りたいものを守れ。」

大きな手で少年の頭を撫でながらそう言った。
そう少年に言ってお兄ちゃんによく似た人は怪獣退治に向かった。
そして残された少年は自分に出来ることを考えていた。ガタッ
さっき銀龍に何かの魔法のような事をしていた場所から物音がした。
少年は音のした方へと走って行くと少年の母親が倒れていた。
？「母さん！」
少年は母親の近付いた。
母親「私を義を行う場所へ。」
少年にそう言うと少年は母を背負い義を行う場所へと歩いていった。

～義を行う場所～

たどり着くと少年は外に出て座りながら義が終わるのを待っていた。
私達も少年の近くに座りながら待つことにした。
母親「こほこほ」
咳をしながら祈りを捧げる女の人に私達も心から祈った。

あの男の子の母親が無事に祈り終わる事を祈った。
？「母さん…」
本当に大切な人なんだ。
でもあの男の子が本当に何者なのかそしてこの本が一体何なのか。
私達には解らないけどこの少年はもしかして私達がよく知っている
あの人。
ガタッ。
？「母さんどうしたの？」
ドアを開けると何者かが剣のような物体が少年の母親の胸に刺さっ

ていた。
？「母さーん！母さんしっかりして、誰か誰か医者を！」
涙を流しながら母親に声を掛ける少年すると母親は少年の右目に手を近づけるすると少年の右目が赤から蒼に変わった。
この二つで私と宮藤さんは確信したこれはお兄ちゃんの記憶だと解った。
母親の手は力が無くなりゆっくりと床に落ちた。
すると屋根が吹き飛び何が起きたのか解らなかった。そこにはドラゴンをパワーアップさせた様な感じだった。
黒鋼「ゴルザ…ぐ、うおおおお！！」
紫色の光がお兄ちゃんの周りに集まりそこに居たのは人ではなく扶桑の巨大な龍だった。
するとゴルザという化け物の腹に噛み付いた龍はそのまま抉りとった。
そして倒された龍の口がいきなり光だした。
すると龍は何処にも居なくなりお兄ちゃんがそこに居た。
亡き母親の近くに近寄り流す涙も失ない光出していたのは銀龍だった。

～黒鋼～

黒鋼「ふう～、いい湯だったぜ。」
何時ものように風呂に入ってた俺はサイダーを飲みながら一人でそう呟いた。
すると他のウィッチ達が俺の部屋に集まっていた。
黒鋼「どうした？」
俺がサイダーを飲みながら聞いた。
ミーナ「黒鋼君、宮藤さんとサーニャさんの様子が変なの。それに

掴んでいる本が全然取れないの」
俺にそう言うミーナに俺は自分の部屋を見た。
黒鋼「ん？」
本を掴むと本は簡単に取れた。
倒れそうになったサーニャを俺が抱き締めた。
宮藤はバルクホルンが受け止めた。
サーニャ「お兄ちゃん…ごめんなさい。」
宮藤「黒鋼さん…ごめんなさい」
二人がいきなり謝る理由が解らないが二人が読んでいた本が鍵を握っているな。二人を治療室まで運んだ俺は二人が意識を取り戻すまで待つことにした。

～二時間後～

二人の意識が戻り話を始めた。
話を一から聞いていくと俺の記憶を見てしまったらしい。
その事で二人は泣いていた。
俺は全く気にはしないが2人が「黒鋼さんの記憶は黒鋼さんだけの物なのに」と宮藤が言った。
黒鋼「別に俺の過去をお前らが知ったからってお前らが気にする事は無いだろ」
俺が二人の頭に手を置きそう言った。
二人は泣きながら頷いた。その日の夜に外で酒を飲んでいるとサーニャと宮藤がやって来た。
黒鋼「何だ？」
サーニャ「私達もお酒一緒に飲もうかなって」
宮藤「私も同じです。」
二人がどうしても酒を飲みたいというので二人のカップに酒を注い

だ。
十分しないうちに宮藤とサーニャは完全に酔ってしまった。
俺は呆れながら二人を自室に寝かして俺はまた一人で酒を飲んだ。
ここまで俺の事を思ってくれた仲間はあいつらだけだな。

続く

第九話　貴方の記憶（後書き）

コメントと感想待ってます。辛口は遠慮します。

第十話　騎士対剣士（前書き）

技が増えてきた。

第十話　騎士対剣士

～黒鋼～

俺の記憶を二人が知ってしまったが俺は別に構わないがあの二人の泣き顔はもう見たくないな。
あの後二人が何故か顔を真っ赤になることが何故か多かった。

その後ミーナから「貴方って本当に鈍感ね。」と言われた。
それがどういう意味かさっぱり解らないがあの二人に関係しているんだろうな。
リーネ「黒鋼さん、今日の訓練に参加するんですか？」
後ろからリーネが聞いてきた。
新しい必殺技を完成させるためなら訓練も参加しないといけないな。
黒鋼「ああ、一応参加するぜ。」
そうリーネに言って何時もの練習場所に向かった。

～砂浜～

巨大な大木を地面に突き刺して靴を脱いで裸足になり蹴り技の強化特訓をした。どんなネウロイも一撃で倒せるようになるために。
さすがに裸足でやるとかなり痛い。
黒鋼「あのウルトラ戦士が使ってた必殺技使えるか心配だがこの技ならあいつらを守る事ができるかも知れないな。」
そう呟きながら俺はトレーニングを続けながらそう思った。
訓練を続けて二時間が過ぎていた。

しかし全く足から炎の様に燃え上がらない。
俺の知っているウルトラ戦士の一人が使用していたがその戦士の名前はウルトラマンレオ俺を邪神から助けてくれた光の巨人。

俺が邪神の光に心を奪われたときレオキックで俺の体内に逃げた邪心の光を破壊してくれた。
あれから１０年経と思うと時間の流れは意外と早いと感じてしまう。
そんな事を考えながら大木に回し蹴りを連続で打つが全く大木が倒れたり焼けたりすることは無かった。
それ以外の魔法の技は上手く使えるが格闘系の攻撃はまだ取得していない。俺の取得した格闘系の魔法は今のところ雷と光と炎と氷と砂と水と毒と種々な格闘魔法を覚えたがレオキックは我が師匠レオが使用したが俺の場合は五つの魔法を合わせた物を使った事が一度だけ使用したがあまりの破壊力に俺は二度と使わないと心に固く誓った。
　その後光線の訓練に切り替えた。
訓練メニューの大半は新しい必殺技だが考えるのがめんどくさいのであまり考えていない。

今のところ光と炎交ぜた魔法攻撃を完成させたがそれはかなりの魔法力を消費してしまう。
坂本「随分と変わった訓練をしているな」
後ろには扶桑刀を背中に背負いながらそう聞いてくる坂本がそこに居た。
黒鋼「そうか？俺的には普通だけどな。」
両手をポケットに入れながらそう言う俺は坂本にそう言った。

銀龍を片手で持ちながら坂本の訓練に向かった。
　すると海の方から何者かの殺気を感じた。
海の方を見たが途中からその気配が消えた

坂本「黒鋼、どうしたんだ？」
黒鋼「いや、何でもない」
俺は坂本にそう言ってまた海を見たがそれらしき気配も姿も感じられなかった。

～バルクホルン～

あいつに家族とか恋人とかそう言うのはいないのだろうか。
ハルトマン「トゥルーデ！」　バルクホルン「どうした？ハルトマン」
私を大声で呼んだハルトマンの方を振り向いた。
ハルトマン「さっきから呼んでるのに聞こえてないみたいだったからさ、そんなに黒鋼の事が気になるの？」
外で訓練をしている黒鋼を見ながら私にそう言うハルトマンに私は顔が真っ赤になりながらこう言った。
バルクホルン「な、な、な、何を言っているあいつはただの部下であって私はあいつの事など全然なんとも思っていない。」
あいつの事など本当に好きじゃない。
ふとあいつの悲しそうな顔を思い出すとどうしてか心がどきどきしてしまう。
あいつがどうして悲しい顔をしているのか時々気になってしまう。
だがあいつに聞いてもそんな顔をしていたかと答えていた。
バルクホルン「ハルトマンもしも黒鋼が自分の居た国に帰ったらどうする？」
私はハルトマンにあいつがもしも自分の居た世界帰ったらどうするか聞いた。
ハルトマン「う～ん、止めるかな？」
確かに私もそうするかも知れないな。
だがあいつは私達の大切な仲間であると同時に私達の大切な人。

～黒鋼～

訓練を終えた俺と宮藤とリーネは昼食の準備に向かった。
今日のメニューは俺お手製の親子丼にした。
ルッキーニやハルトマンはうまそうに食っていた。
俺は海で感じた気配が何なのか考えていた。
　海の方をもう一度見てみたがやはり気配は感じられなかった。

俺は大浴場に向かった。
風呂に入り俺は一人で考えていた。
黒鋼「俺も何時かはこの世界から去るんだろうな」
そう呟いた。
ぽちゃん。
黒鋼「誰だ！！」
俺は殺気をだしながら大声で隠れている奴を呼んだ。宮藤「……黒鋼さん。」
そこに居たのは俺の命の恩人の宮藤芳佳だった。
黒鋼「芳佳、お前聞いてたのか？」
宮藤「…」
芳佳は静かに頷いた。
俺は先に風呂から出た。
その時の芳佳の表情を思い出した。
その時の顔は俺の記憶を知ってしまった時の表情と一緒だった。
本当なら自分の居るべき世界に帰りたいがこの世界が好きになってしまったがためにそんな感情が無くなってしまっていた。

～夕方の砂浜～

夕日が沈み夜になろうとしていた。
すると空から何かの気配を感じた。
ミーナ「やっぱり此所に居たのね。」
後ろには隊長のミーナが後ろに居た。
黒鋼「悪いか。」
ミーナ「いいえ、聞いたわよ貴方自分の世界に戻るみたいね。」
芳佳の奴がチクったみたいだった。
黒鋼「俺が自分の世界に戻るのは当然だろ」
俺は腕を組みながらそう言った。
ミーナの後ろからストライクウィッチーズの皆が立っていた。
黒鋼「お前ら…」
俺は後ろからまた殺気を感じた。

上空から大剣が四本落ちてきた。
俺は落ちてきた大剣を見た。
そして空から人の形をしたネウロイが現れた。
坂本「何、人形だと。」
坂本が驚いていた。
黒鋼「俺が奴と戦っている間にお前らはストライカーユニットを履いて来い！」俺は銀龍を鞘から抜き人形ネウロイに攻撃をした。
黒鋼「喰らえ雷撃波！」
雷属性魔法を発動した。
上空から雷が四本同時に落ちた。
黒鋼「どうだ」
俺の技の中ではあまり強力ではない魔法攻撃だ。
しかしまともに喰らったらネウロイの装甲に穴が空いている筈だ。
しかし煙りが晴れた瞬間人形ネウロイの体に異変が起きた。

奴の右腕がランス系に変わっていた。
黒鋼「これはまさかカオスの悪魔が蘇ったのか…」
そんな事を考えているとネウロイは連続で攻撃を仕掛けてきた。
俺はネウロイの攻撃を防ぎながらあいつらが戻ってくるのを待ち続けた。
黒鋼「く、うおおお！！」
力強く銀龍をネウロイに振りかざした。
火花散る刀とランスの対決に俺自身の目は多分本気だろう。
黒鋼「おい、お前は一体何なんだ！！」
銀龍の刃をネウロイに向けて聞いた。
ネウロイは何も言わずにランスをこちらに向けた。
黒鋼「殺るって言うなら本気で殺るしかないようだな！」
俺は右手からバリバリボールを連続で放った。

〜宮藤〜

黒鋼さんが作ってくれた時間を無駄にするわけにはいかない。
リーネ「頑張ろうね芳佳ちゃん」
リーネちゃんが私にそう言ってくれた。
宮藤「うん。」
私は思い出していた前に黒鋼さんが私に勾玉を渡してくれた日の事をだけどあの勾玉のおかげで私は最高の友達と出会うことが出来た。
そして黒鋼さんにこの勾玉を返さないといけない。
だけどこの勾玉を返したら黒鋼さん元居た世界に帰っちゃうんだよね。
私はそう思いながら黒鋼さんが待っている砂浜まで飛んでいった。

～黒鋼～

黒鋼「うらぁ！！」
回し蹴りがうまくネウロイの腹部に決まった。
しかしネウロイの装甲は思った以上に固かった。
とても素手で勝てる相手では無さそうだ。
黒鋼「お前には使う気は無かったが使うしかないようだな…」
両手から氷の魔法を発動させた。
両腕を大きく広げそして背中にドラゴンウイングを発動させた。
ドラゴンウイングの羽から氷の竜巻がネウロイに直撃した。
黒鋼「俺が本気を出すわけにはいかないからな」
俺は基地に帰ろうとした。
その時剣から強力な電撃が流れ出した。
つまりこの剣の結界から出るにはネウロイを倒さなければいけないと言うことだ。

すると氷漬けにされたネウロイが蘇った。
ネウロイ「ワ・タ・シ・ト・ホ・ン・キ・デ・タ・タ・カ・エ・」
はじめて聞いたぜネウロイが話すことが出来るとは。
黒鋼「本気で戦えだと１００万年早いぜ！！」
人差し指をネウロイに向けてそう言った。
銀龍で攻撃を仕掛ける俺だがネウロイのパワーに少し圧され気味だ。
右手に炎属性の魔法を集中させてマグマパンチをネウロイの頭部に打ち込んだ。
しかし全く効いていなかった。

俺は額に光のエネルギーを集めウルトラマンガイアの必殺技フォトンエッジを放った。

ネウロイの装甲を破壊しコアが出てきた。
すると後ろから何者かの銃弾がネウロイのコアを破壊した。
後ろを振り向くとストライクウィッチーズの全員がやっと来てくれた。
俺は銀龍を鞘に戻した。
しかし後ろから何者かの殺意をまた感じた。
それは二秒後に起きた。
後ろには倒れされた筈のネウロイが蘇っていた。
目にも止まらない早さの攻撃を仕掛けてきた。
宮藤「黒鋼さん！！」
俺を心配して来ようとした宮藤に俺は銀龍を皆が居る方に向かって投げた。
ミーナ「何のつもりなの黒鋼君」
俺は素手を氷の剣に変えた。
黒鋼「っく！！」
うまくネウロイの攻撃を受け止めた俺は氷の剣を地面に突き刺した。
地面から氷の刃がネウロイに襲い掛かった。
ナイトネウロイは全ての攻撃を交わした。
黒鋼「宮藤！！俺の部屋からアイスラッガーを持ってきてくれ。」

俺は宮藤に大声で命令した。

宮藤「は、はい！」
芳佳は一瞬混乱していたがアイスラッガー取りに行った。
俺は氷の剣でネウロイの攻撃を弾き返したがナイトネウロイの力は普通のネウロイよりもかなり上だ。
俺は中距離から両手を拳にして火属性の技魔法ヘルマグマを放った。
ネウロイはランスでヘルマグマを防いだ。
黒鋼「っち！効いてないか」

俺は舌打ちをしながら氷の剣見たら刃がボロボロになっていた。
こいつであの騎士のようなネウロイと戦うのはかなりのリスクを伴う。
黒鋼「ヘルマグマ効かないならこれならどうだ。」
両手に雷魔法サンダーブレードを放った。
ナイトネウロイの右腕を破壊した。
ネウロイに少しだが隙が出来た瞬間に回し蹴りと口から暴君火炎を放った。
黒鋼「どうだ！！」
さっきの攻撃を喰らったら無事で居られるわけがない。
しかし騎士型ネウロイは右腕からウィッチ達と同じ魔力シールドを使った。
俺は自分の体力を消費してしまった。
黒鋼「親父…母さん使わせてもらうぜ。最強最悪の闇魔法ギガレゾリューム光線だ！！」
空から2つの紫色雷が落ちてきた。
それを両腕から放った。
ネウロイは魔力シールドで防ごうとしたが魔力シールドを破壊し騎士型ネウロイの体は錆びた鉄の様に崩れ落ちた。
俺は闇魔法使うのは始めてだったので邪神の力がまた蘇りそうになった。
しかし俺は自分の力で邪神の力を封じ込めた。
二分程して芳佳がアイスラッガー持ってきてくれたがすでにネウロイとの闘いは終わり四本突き刺さっていた剣はサーニャがフリーガーハマーで破壊してくれたおかげで外に出ることが出来た。

続く

第十話で主人公が使用した技と魔法（前書き）

最新

第十話で主人公が使用した技と魔法

ヘルマグマ
用心棒怪獣ブラックキングが口から放った熱線を黒鋼の場合は拳に炎の魔法を集中して放つ。
アイスソード
冷凍星人グローザムがメビウスとの戦いで使用した物と同じで強度は普通の刀より少しだけ弱い。
サンダーブレード
アイスソードに雷属性の魔法を集中して放つ中距離型の射撃型の魔法攻撃で敵に突き刺さる姿からライトニングソードとも言われていた。

ギガレゾリューム光線
暗黒魔鎧装アーマードダークネスの必殺技で敵を一撃で闇に変えてしまう最強の技を黒鋼は邪神の力を借りて使う事が出来る。
暴君火炎
暴君怪獣タイラントが口から放つ火炎攻撃を黒鋼も口から放つ事が出来る。
アイストルネード
ドラゴンウイングから放つ氷の竜巻敵に直撃すると一瞬で固まる。
雷撃波
雷属性の魔法を上空に向けて放つ黒鋼が始めて覚えた魔法の一つ。しかしあまりに威力が弱いため本人は滅多に使わない。

フォトンエッジ
ウルトラマンガイアが額から放つ大地の矢、敵に直撃して爆発する。属性は光魔法

遅れましたが。主人公がしようする武器または戦闘機（前書き）

武器

遅れましたが。主人公がしようする武器または戦闘機

銀龍
黒鋼の先祖が昔から愛用していた。
その昔龍の額から発見された剣でどんな攻撃も防いでしまう。
黒鋼が魔法攻撃をすると特殊な波動で刃を守っている。
そのせいか刃がボロボロになったりしない。

シグバルカン
黒鋼が始めてウィッチの世界で作り出した武器の一つで破壊力はリーネの対装甲ライフルと同じ破壊力を持っている。
弾は対装甲ライフルと同じだ。

スペースペンドラゴン
黒鋼がウィッチに仲間と認めてもらうために作り始めた大型船艦海や空や陸でも活躍できるように黒鋼が毎日シャーリーといじっている。
武装はワイバーンミサイル、対アステロイド砲、ペダニウムランチャー、ドラゴンスピーダーのバルカン砲等がある。

アイスラッガー
ウルトラセブンが頭に装備している宇宙ブーメランでどんな敵も真っ二つにする事が出来る。
黒鋼はこのブーメランをゼロの父から受け継いだが何に使うかはまだ考えていない。

遅れましたが。主人公がしようする武器または戦闘機（後書き）

戦闘機

正月とＰＶ五万アクセス（前書き）

新年明けましておめでとうございます！！

正月とＰＶ五万アクセス

黒鋼「おい、お前ら準備は良いか？」
黒鋼は普段着ている服ではなかった。
宮藤「黒鋼さんちょっと待ってください。あとリーネちゃんとルッキーニちゃんとサーニャちゃんとエイラさんとシャーリーさんとハルトマンさんとバルクホルンさんとミーナ隊長と坂本さんとペリーヌさんの着付けがまだなんです。」
芳佳はリーネの着付けをやっていた。
黒鋼「仕方ね～な、俺も手伝ってやるよ。」
黒鋼はルッキーニの着付けを始めた。
ルッキーニ「黒鋼ってなんでもできるんだね。」
目をキラキラさせながらルッキーニがそう言った。
黒鋼は呆れながらルッキーニ頭を撫でながらこう言った。
黒鋼「慣れてるからな。」次の着付けに移ろうとしたがさすがに手が足りなかったようだ。
黒鋼「おい、作者突っ立てねーで手伝ってくれ。」
え、俺？
黒鋼「ああ、お前だよ。」
俺着物の着付けなんてやったことが無いんだけど。
ちょっと待ってろあいつら連れてくる。
？「ったくよ、作者の奴いきなり俺達に黒鋼の手伝いを手伝ってくれって言ってきやがって。」
金髪の青年が歩きながらそう愚痴っていた。
？「まあまあ。良いじゃないですか。」
宥める少年。
黒鋼「お前等誰だ？」
黒鋼がシャーリーの着付けをしながら聞いた。
勝人「俺は宮沢勝人、作者にいきなり手を掴まれて黒鋼の手伝いを

やって来れと言われた。」
宮沢勝人、光を見守る高校生の主人公。
響鬼「坂本響鬼です。右に同じです。」
坂本響鬼とある科学と音撃道の主人公。
黒鋼「まぁ、何だ手伝ってくれよ。」
黒鋼がそう言った。
響鬼「はい、わかりました。」
響鬼は笑顔でミーナの着付けを始めた。
ミーナ「悪いわね、」
ミーナは響鬼にそう言った。
響鬼「いえいえ。」
響鬼はミーナの着付けに集中しながらそう言った。
勝人「ちゃっちゃっと終らせるか。」
勝人はバルクホルンの着付けをしていた。
バルクホルン「すまないな。」
バルクホルンは申し訳なさそうに言った。
勝人「気にすんな。」
勝人は表情一つ変えずにそう言った。
黒鋼「よし、サーニャ、一応気付けは出来たぜ。」
黒鋼はサーニャの顔に化粧をして終った。
サーニャ「わぁぁぁ、ありがとうお兄ちゃん。」
サーニャは黒鋼に抱きついてそう言った。
俺達はストライクウィッチーズの全員の着付けが終わった。
黒鋼「おい、皆準備は良いか？」
全員「「「「「「「「「「「「「はい！！」」」」」」」」」」」」
」
俺達は全員正座をして皆でお辞儀をした。
全員「「「「「「「「「「「「「新年明けましておめでとうございます！！今年もストライクウィッチーズ私達を守ってくれた人をよろしくお願いいたします。」」」」」」」」」」」」」

皆さんよろしくお願いします。

正月とＰＶ五万アクセス（後書き）

コメントお願いいたします。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7562t/

ストライクウィッチーズ私達を守ってくれた人

2012年1月1日21時47分発行